

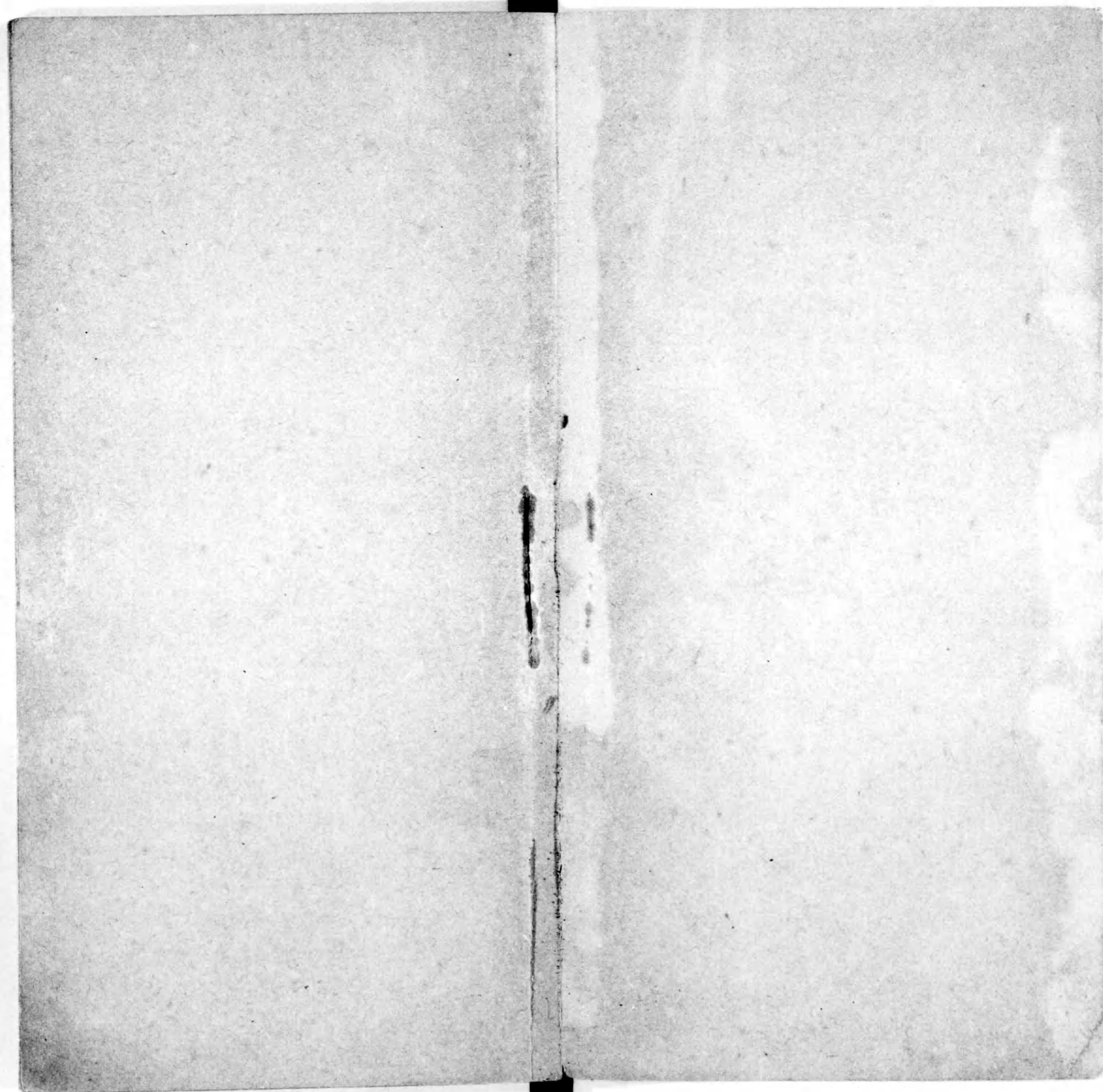


庫文劇悲
娘と母
 著者冠頰

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁹/₇₀ 1 2 3 4 5
 m

始





特100
332

THE WORLD'S AN INN AND DEATH
THE JOURNEY'S END



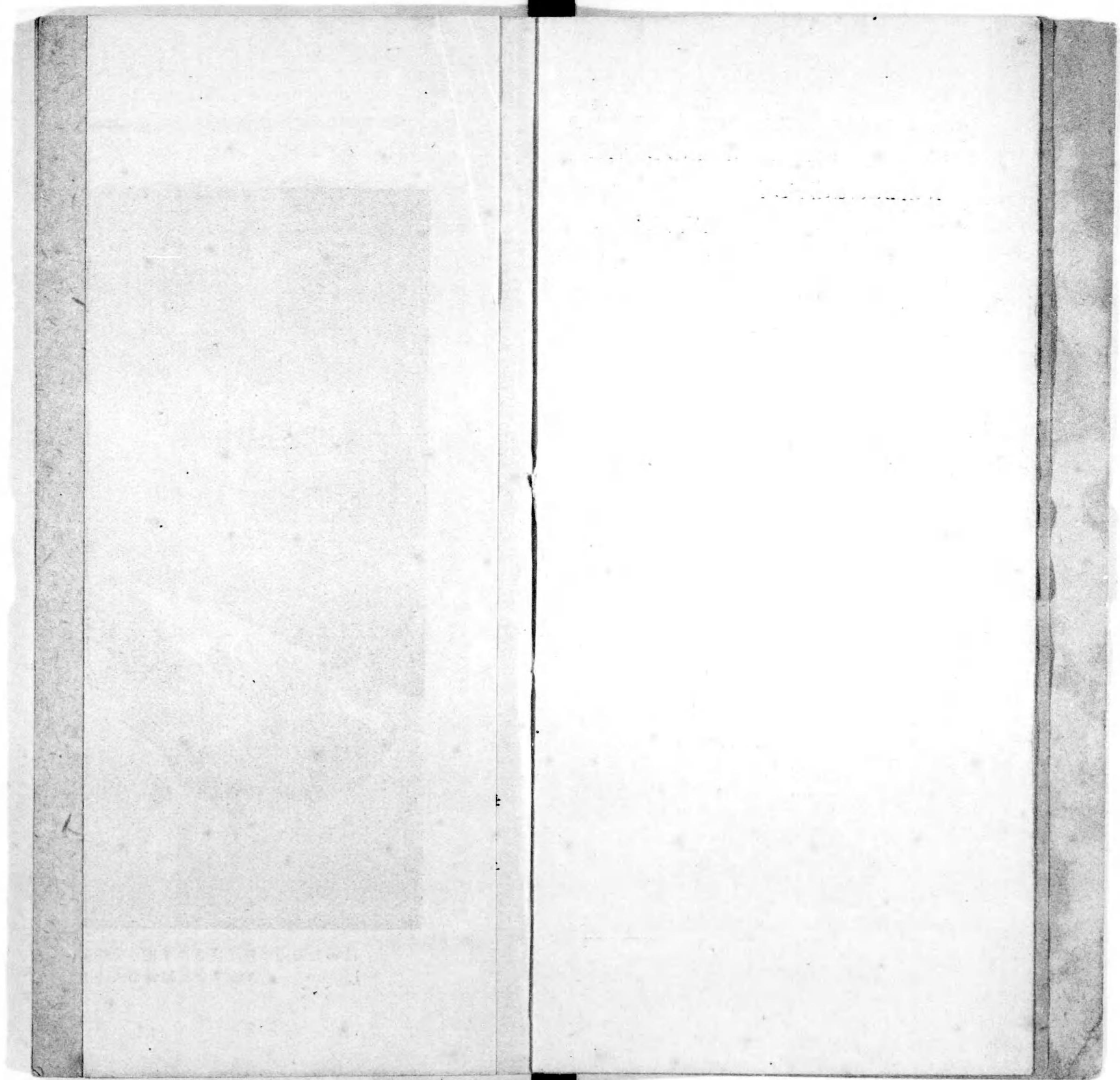
死は即ち旅行の終也



世界は逆路にして

KYUKOKAKU
Kyobashi Tokyo







母
と
子

にめたの夫車悪は貞童の子梅や今鳴悲の女く響に闇、といさ下て來か誰、か誰
【。……………んさ梅、オ】年青の人一たせ合り通くより折、がたしとんれら躑み踏

御あいさつ

人間は誰でも、慰安といふものが最も必要であるが、その慰安が餘り多きに過ぎ、或は永きに亘れば、却つて情落到陥るのである。で同じ小説でも、徒らに事件を曲折し、或は字句を引き延して、讀者の大切な時間を偷むといふことは、夙に生等の憂ふる所である、如何に慘澹たる十年の告白も、十幕二十幕に仕組むべき悲劇も、僅か二百頁の小冊子で充分盡されるのである。本の大小、字句の多少が、直ちに小説の興味ではない、價値ではない。十七字の詩克く茶人の願を解かせ、三十一文字の歌克く閨々の戀情を盡す。即ち二百頁の小冊子、亦克く波瀾重疊の悲劇を舒するに充分なのである。……と理屈を言へば、聊か手前味噌の嫌ひはあるが、先づ一編をお試しあつて、續々御愛讀あらんことを、と……爾云

發行者白す

悲劇 母と娘

頰冠者著

〔一〕

大立關の客下駄を瞥見と見た梅子は、己の部屋へ這入るや否や、机の上に學校の包を静かに置いて、崩れるやうに膝をつき、太い溜息を洩しながら、客間の氣配を聞き取らうとした。

何となく胸が動揺いて、顔が赫と火照るやうな、恐ろしいとも付かず、悲し

いとも付かぬ不安が崩して、たゞ譯もなく心が顛へた。

『お母様が何と仰有つても……妾……』と梅子は負れる心を強いて引き立てるやうに泣やいた。

やうやく某女学校の卒業試験を終へて、同窓の記念寫真も撮影し、最上此上は卒業式に臨みさへすれば、梅子の學生々活は全部終結するのである。五年の間心の底を語り合つた親しい友達にも、最早や別れくにならなければならぬのである。花やかな處女の胸にも、初めて會者定離の世の果敢さが浸入るやうに思はれて、感情は聊か鋭くなり、稍や興奮して居た。

此の心理状態の變遷期ともいふべき、即ち女學生から人妻に移らうとする矢

先、突然、母の松代が梅子の心を掻き亂した。思ひも寄らぬ昨夜の母の言葉、道ならぬ強制的な言葉、梅子は今日の客と思ひ合せて、涙ぐまずには居られなかつた。

『お嬢様、お母様がお呼びでございますよ』

と、乳母のお須賀が静かに這入つて来て、氣遣しさうに梅子の打ら凋れた顔を覗いた。

『何か御用なの？』

『アノ、お庭敷へ行らつしやるやうにと仰有るのでございます。』
『鵜川さん、來てるんでせう。』

「エ、よく御承知でございますねへ、」

「妾、嫌やよ、お母様は、何故鶺鴒川さんがお好きなんぞせう、妾、大嫌ひ…」

「まあ、其座ことを仰有つて…」と、お須賀は嗜めるやうに言つたものゝ、梅子の心の底を酌み取るやうに顔を窺ひながら「其座こと仰有るものぢやございませぬよ。ねへ、お母様が御無理を仰有つても、又乳母には乳母の考がございませぬから」と、すつかり呑み込んで居る顔つき、産れ落ちるから乳をくれて育て上げた梅子を、我が娘とも思つて慈しむは當然だが、梅子も又生母の松代よりも、お須賀によく馴染んで、涙もろい優しい性質さへ酷似であつた。そしてそれが一層二人の間の情愛となつて、知らぬ者が見たら、眞の

れる程であつた。

「だつて妾、本統に彼の人、嫌よ…それにお母様は、昨夜のやうなことを言ふんですもの」と、梅子はお須賀に對すると、稍や甘ツたれるやうな口をさくのが癖であつた。

「エ、エ、お母様が何と仰有つても、貴嬢には、實様といふ立派な…ねへ、」

「あら、」と、梅子は無邪氣に睨む。

「イ、エ、それが道でございますよ、幾等人は零落れても、七轉八起と言ひますから、又御出世遊ばす事もございませう。只だもう、お亡父様のお約束なすつた事は何所までも、守らないと、亡父様に申譯がありません。第一それ

「が女の道でございますからねへ、」

「然う、妾、然う思つて居るんだけど、お母様が、種々なことを仰有るんですもの……」

「何と仰有つても、乳母が付いて居りますからねへ、心配はございません、一寸お座敷へ行つて御覧なさいませ」と、お須賀は賺すやうに、美しい、可愛い我娘と言つては勿體ないが、我娘よりも可愛い梅子の顔を見入つた。

「だつて……定夫つて人も來てるんでせう。」

「エ、伯父甥で來て居ますのよ、奥様も奥様だけれど、随分押し強い……」

「什麼人？」と、梅子は少し羞耻むやう、

「嫌なハイカラでございますの、私だつて彼麼人は虫が好きませんわ。華美な洋服を着て頭をテカ〜光らせて……まあ嫌やです事、他人様の事を悪くいつては濟みませんけれど、全くなんですよ、まあ行つて御覧なさいませ。」

「妾困るわ、お母様が無理に結婚しろと仰有つたら、如何したら好いのでせう。實さんに申譯かないわ、實さんのお父様だつて、什麼にお怨みなさるか知れないわ。」

「それは、私がちやんとねへ、此所にございますよ」と、お須賀は胸を敲いて見せて「其麼事つてございませんわ、什麼ことがあつても亡父様のお約束通り實様とお添はせ申します。」

「でもねへ乳母や、お母様が、如何でも斯うでもしろと仰有つたら、しない譯に行かないわ、吃度然うなんだから……」

「それは又其時の事、好い考へもございませう。然うビク／＼なさらずと行つて御覽なさいませ。」

「困るわねへ、」

「其麼氣の弱い事ぢや不可ませんよ、ナアニ關ふもんですか、嫌やなら嫌やで斷然とお斷りなされば宜しうございますよ、お亡父様の御遺言をお守りなさるのに、誰が何といふものでございますか、お母様だつて、何だか得體の解らぬ人を……」と、お須賀は勵ます積りで言つたが、遂、妙な事を言ひかけ

たので、慎み深く口を噤んだ。襖の外で先刻から立聞きして居た者が、忍び足に歩み去つたけれど、二人は少しも氣が付かなかつた。

〔三〕

暫らくして、荒い寢音が近付いて、境の襖を手荒く開けた者がある。銘仙の常着の上に、黒縮緬の紋付をダラリと羽織つた母の松代であつた。お酒が大部還つて居ると見へて、白粉を塗りたてた臉に紅が潮して居る。年は四十二だと言ふのだが、お化粧が行き届いて居ると、一體が華美好みなので、一番の丸鬘も目に立つ程不似合ではなかつた。

「お前方は、何をしてお出でだえ」と、尖り聲で二人を睨み付けた「梅子、お前は何故お座敷へ来ないの？、妾の言ふ事は聞けないの」と、先づ梅子をグツと睨んで、直ぐその目を乳母やお須賀に向ける。「お前もお前さやないか、最う今日と言ふ今日こそ堪忍袋の緒が切れた。暇をあげるから出て行つてお呉れ！」

「エ、ツ！それや奥様、ど如何いふ譯でございます。如何いふ譯で私を…？」と、お須賀は餘りの事に愕然として、思はず前へ乗り出すやうにした。

「如何も斯うもないよ、妾の事を…種々な事を言つて梅子に智恵を付けるやうな者、家の爲にもならず、第一梅子の爲めにもならぬから、暇を遣ると言

ふのだよ、今日かぎりさつさと出て行つてお呉れ」とお酒の還つた顔へ一層血の氣を漲らせて言ひ放つた。

「私が…私が、何日奥様の事を申しました？私はそんな覺へはございませんはい毛頭ございません。」

「隠したつて駄目ですよ、何日に限らず、妾の事を悪く言つて、切つても切れぬ肉身の母娘の仲を呪ふやうな者は、片時も邸へ置く事は出来ません、先刻だつて、此所で鶉川さんが如何の斯うのつて、種々な事を言つて居たと言ふぢやないか、早く出て行つてお呉れ」と、松代は動かす事の出来ない堅い決意があるやうに言つた「梅子も梅子だ、此處者の言ふ事を本統にして、お母

様や鶉川さんの事を、悪く思ふと訊きませんよ。鶉川さんは、浅倉家に取つては、大切な後見者ぢやないか、若し恁麼陰口がお耳にでも這入らふものなら、それこそ大變なのだよ、早くお座敷へお出で……」と、松代は威壓するやうに言つて、俛首れて居る梅子の手を取つた「立たないの、此娘は——」

「はい」梅子は悄悄立ち上つた。
 松代は又一層不興氣な顔をお須賀に向けて「お前は早く荷を纏めて、宿へ下つてお呉れ。」

「奥様！」と、お須賀は慌て、其袖に絶つた「私は決して其やうな事を申した覺へはございません、それは誰かの讒訴でございます。」

「イ、エ、お前が何と言つて隠しても、妾は確然と知つて居ますよ。早く歸つてお呉れ。」

「歸りません、イ、エ歸りません、私は、私は、死ぬまでお嬢様のお傍は放れません。ねへお嬢様、萬望貴嬢様からも……」と、お須賀は老の涙を袖に拭つた。

「お母様、萬望、乳母やの事を免してやつて下さいませ、ねへお母様……」梅子も目を潤ませて口を添へた。

「まあお前方は……」と松代は呆れ返つたやうに「イ、エ、なりません、何と言つてもお須賀は一日も邸へ置く事はなりません。斯う言ふ口の下から

梅子を味方に引き入れて、主人の言ふ事を訊かないなんて、呆れてものが言へやしない、最う其麼ことで騙されやしないよ、お前も、乳母やの事なぞ關はないで、早くお出で」と、袖を拂つて梅子を拉し去らうとする。

「奥様！、そればつかりはお免し下さいませ、如何やうな苦勞も厭ひません、お嬢様のお側へお置きなすつて下さいませ。」

「まだ梅子に意地が付けたいのかい、まあ呆れたもんだねへ。」

「其様な……それは、奥様のお偏癢でございませ、御主人様の事を、悪く申すなんて其様な事が……」

「妙な事をお言ひだねへ、妾の偏見だつて……何のための妾が偏見むのだへ、

主人が召使に偏見まにやならないやうな譯が何所にあるのだへ、愚圖々々言はずと、早く宿へ下つてお呉れ、妾は何と言つても、お前のやうな者は置かない、決して置かないよ。」松代は益々聲を鋭くした。

「それでは如何あつても……」

「早く歸つてお呉れ、妾は最う顔を見るのも嫌やになつた。」

「お母様、萬望そればつかりは……」と梅子は取られた手に力を入れて、昵と母の顔を見上げた。

「イ、エ、駄目々々、母様は誰が何と言つても、最う乳母やは置きませせん、お前が何も口を出す必要はありません。黙つてお居でなさい。」

「奥様！」と、お須賀は怨しさに松代の顔を見上げた「お産れなさるから此年までお育て申して、一生お傍を離れまいと思つて居りましたのに、今更……今更……暇を遣るとはお情ない……萬望奥様、お願ひでございます。』

「執拗よ、暇を遣ると言つたらサツサと出てお行で」と、松代は突き出すやうに言つて、先刻から此様子を襖の外から覗いて居た女中のお勝を見返つた。するとお勝も鬨の内へ這入つて、

「お須賀さん、最う好い加減に諦めて出てお行でなね、お前さんがお嬢様に智恵を付けて居た事は、私が確然と此の耳で聞いたんですよ、口は災禍の因つて、好く言つた物だわねへ。ホ、ホ、ホ」と、お勝は憎くくしさに嘲笑

つた。
「エ、ツ、お勝さん」と、お須賀は息を迫ませて「お前さん、好くもく私を讒訴したね！最う最う私、我慢が出来ない」と、勝氣なだけに、武者振り付かうとした。

「何を、妻が暇を出すのだよ。」

「奥様！、それでは、お嬢様のお行末が……」

「梅子の行末が如何したと言ふんだねへ、不要お世話だよ、梅子は妾の子だからねへ。血を分けた母娘だからねへ。他人のお前が餘計な事をお言ひでない早く歸つておくれ」と、松代は何と言つても聞けばこそ、梅子の手を無理に

引張つて行く。

「お嬢様……」と、お須賀は最早や追ひ絶る勇氣もなく、言ひたい事も口には出せず、目を連瞬いて見送つた。

梅子は振り返つた涙顔を、袂で掩ふて又顔は見へなかつた。

〔三〕

障子を明け放つて、縁側の硝子戸越しに、數代の主人に手入れせられた奥床しい青苔の庭園が、南を受けた座敷から見晴されるのであつた。塀際の狭くするしい所に、枝の優しい割合に、傲然と頑張つた八ツ手と、慳らしい常盤木の手

前に、淋しく春日燈籠が建つて居て、その下に躑躅が咲いて居る。一體に青い常盤木が多いので、塀の忍び返しも所々しが見へなかつた。

「如何ちや、庭でも斯う地味な方が、何となく品位があつて、奥床しいもんだねへ、お前も氣に入つたらう。」

と、糸織の袷に七々子の紋附を着た鶴川泰輔が、自慢さうに甥の定夫に言つた何方かと言へば肉附の好い丸顔、口から頬へかけて、人を引き附けるやうな愛嬌のある四十男。縮緬の長襦袢なぞ着て居る所から見れば、株式にでも手を出しさうな男、野暮臭い所がなくつて何所か垢抜がして居る、と言つて、藝人と言ふ柄ではない、先づ金持の若隠居、好きで義太夫の一ツも唸らうと言ふ人體

である。

此叔父を持つた定夫は、全然血統を引いて居ないやうに、容貌から身體の姿勢までが、少しも似て居なかつた。色こそ白いが眼の鋭い、眉の濃い、他人の腹の底まで見透うさなければ止まないと云つたやうな、一癖あり氣な人物、早くから兩親を喪つて、十七の時に單身渡米し、八年間苦學して此程歸朝したのである。

「然うですなへ」と、膝を崩して身體の中心を取るやうに、後方に手を衝いて庭の方を振り返へつた。強度の近眼鏡が、ギロリと光つた。

「お前も、是れ位の邸に住はれるとすれば、先づ満足してくれんと困る」と、

泰輔は應鷹に、定夫の胸中を見透して居るやうに、寧ろ或る誇りを臭はせた。

「如何ぢや、不足かね、財産はあるし、梅子は美人だし、お前は米國で何程立派な勉強をして來たか知らんが、却々腕一本ぢや然う出世は出來ん。」

「さうです。叔父さんのお蔭で、此家へ來られるとしたら、斯麼好都合はありません。定夫は居住居を直すやうにした。」

「それや私の自由だ、お前さへ承知なら、直ぐにでも話は纏めてやる。」

「はい、萬望……」

「それだけは、安心して當にして居るが好い、譯もない事だ」と、悠々と盃を干した。定夫は誠實な態度で氣轉をきかせて銚子を取つて、慎しきうに酌を

する。泰輔は豊かな安座に臂を突いて、九谷の盃に波々と受けた。

「然し、私が斯う言ふ境遇に居るとは思はなかつたらう、お前が渡米した頃は随分道樂をして、莫迦な真似ばかりして居たからねへは、は。」

「全く意外でしたよ」と、定夫ははんかちで掌裡の脂肪を拭き取りながら「横濱へ着くまでは、歸朝するのは好いが、如何いふ風にして身を立てやうかと實は心配して居ました。金でも儲けて歸朝すれば何でしたけれど、只だ勉強を勉強をと思つて、金と言ふ物に些とも重きを置いて居りませんでしたからねへ、——それに、何處へ勤めるとしても、推薦者が無いのを心配しましてねへ。」

「は、は私を訪ねた所が、迎も相談相手にはならないと思つたらう。」

「全く詐りのない所、事情を聞くまでは然う思つて居ました。」

「無理もないさ、以前が以前だからね。然し最う年を取つた故か、あの時分のやうな無鐵砲な事はやりたくつても行れないよ、私でも少しは考へらアね、と、泰輔は地見な事を言つたが、さて態度には何處となく、粹な通人らしいところが見へて、流石に今まで下らない金を費つて修業した腕前が、歴然と窺はれた。

次ぎの庭敷から來る琵琶がしたので、二人が其儘談話を止めて居ると、心持ち憤懣を現はした松代が、スウと境の襖を明けて「サアお這入り」と、伏目に

なつた梅子の手を、嚴然と引いて這入つて來た。

夫れと見て、定夫は居住居を直す。

「斯麼に大きな體軀をして、人見知をするのだから嫌やになつて了ふ。お前、本統に確固しておくれでない、お母様の心配が絶へないぢやないの」と、松代は叱言をいひながら、銘仙の座布團に膝を下した。

「梅さん、今歸つたのかね。」

泰輔は愛想よく、莞爾した。

家へは始終詰めつきりに來て居る人だが、梅子は餘り近づきませず、母も今までは成可く二人の差し向ひの所へは近けなかつたので、出入が繁しい割合に

親しくなかつた。殊に昨夜母から定夫の事を聞かされたので、定夫の手前も耻かしくつて、俛首いたまゝ、顔も得上げず「入來つしやいませ」とのみ、意久地なく躍る胸を凝乎怵へて言つた。

定夫も心持ち會釋して、梅子の言葉が我にか他人にかと判じかねたやうに、間誤付いて遂返事もしなかつた。

松代と泰輔とは、互に何事か意味が通じて居るらしい眼光をチラリと見交して、照れかくしのやうに兩の袖口を揃へながら「定夫さんのお氣に入るか如何か知れませんが、本統にまだ此の通りの未通女ですからねへ。」

「それが花さ、若い男の前で平氣な顔をして居るやうになつちやお終いだ。」

泰輔は立膝に片臂ついて、楊子で齒を穿返りながら、態と耻かしかる梅子の方へ顔を向けなかつた。

「サア梅子、定夫さんにお酌をしてお上げ、今から少しお親交になつて置かなきゃ困るぢやないか、ねへ、梅子」と、松代は常の如く優しく言つた、梅子は拒みも得せず、と言つて、従順に酌をする勇氣もなかつたので、益々身體を堅くするのみで、返事が出なかつた「梅子、お前如何したの、」「はい」と、益々もぢくする。

「鶉川さんの前だから好いやうなもの、失禮ぢやありませんか。」

松代が少し鋭く言つたので、泰輔は察しよく「ナニ好いです、女は是れ

位でなくちや不可。」

「まあ、始めて定夫さんに逢つて、失禮ですわねへ、その内また馴れば斯うでもありませんまいけれど、世間見ずの我儘育ちだから仕様がありません、それにね、婆やに暇を出したのが氣に入りますので」と、松代は不要辨疏までして「此年になつて、まだ乳母が欲しいんですもの、本統に困つたお嬢さん定夫さんに嫌はれたら大變ですよ。」と、松代は最う一人で何もかも定めて居るやうに言つた。

〔四〕

梅子は生れ落ちてから、松代に乳が無かつたので、お須賀の手一ツで育て上げられ、十九の今日まで母の松代よりもお須賀に馴れ親み、心ゆきさへよくお須賀に似通つて、情深い、正しい成人であつた。で、今更お須賀に別れるのは何よりも悲しかつた。今この酒の座敷に引き出されて、心にもない酌なぞさせられ、嫌やな酒を強られながらも、絶へず襖の外へ耳を傾けて、乳母は最う行つてしまつたかと、そればかりに心を痛めて居た。

思ひは同じ乳母のお須賀は、涙ながらに荷物を拵へたが、旦那様の在世中に

一生飼ひ殺にしてやる——とよく口癖のやうに言はれて居たことを思ひ出して自分でも其氣で居ただけに、今更淺倉家を追ひ出されては、便とする所は少しもなし、如何して此先き暮して好いやら、自分ながら前途が危ぶまれた。亭主には妊娠中に捨てられ、産み落した兒は一月と経ぬ内に死去なり、その時から我兒と思つて育て上げた梅子、十九年間の情愛は、眞の母にも勝つて居るものを、何で涙なしに別れることが出来やう。前途を案じるのは、多くは利害から起る苦悶であるが、お須賀の悲しみはそれよりも、一層悲しい恩愛の涙であつた。

今一目なりとお顔を見て——と、老の身の涙を流しながら、恐る／＼客間の

襖を開けて、

『お嬢様!』と、たゞ一言、後は涙に堰き止められて、暫らくは言葉も出なかつた。

『乳母や』と、梅子はすぐ駈け寄りふとした。それと見た母の松代は、手早く梅子の袖を抑へて、

『お前は何所へ行くの?。お客様の前で失禮な。』

と、ちつと側へ引き附けて、ぐつと睨んだ眼を、すぐ襖の外のお須賀に鋭く向けた。

『何だへお前は、何の用事でお座敷へ来たの、お前なぞの来る所ぢやない、早

く引き取つておくれ、何時まで愚圖々々して居るんです。』

『奥様……』と、お須賀は破裂れるやうな調子で呼びかけた『お言葉に従つて直ぐ下りますから、萬望、今一言お嬢様に』と、哀訴して後は涙手に持つた手拭を顔に押し當てた。

『不可ないよ、お前はまた梅子に意地が付けたいの。黙つて早く下つておしまい、それとも妾に言ひ悪いから、梅子にお金でも強請む氣なのかへ。』

『エ、』と、お須賀は結とした。

『イ、エ、隠さなくつても、それならそれと言へば、幾等妾だからつて、少々のお金なら呈げるわね、ねへ、さあ涙金を呈げるから早く出てお行で』と、帯

の間から一枚の紙幣を出して歩み寄つた。

泰輔と定夫は、先刻から詰らなさうな顔をして、聞くともなしに聞いて居たが、直ぐ氣をかへて、定夫は米國の土産話を仕出した。涙を眼に一杯溜めて座に居た堪らぬらしい梅子を慰める積りかして、時々俯向いた顔に鋭く目を働かせる。泰輔は終に、横に臂をついて、如何にも面白さうに合槌を打つのであつた。

「要りません、はい、お金などは要りません！」と、お須賀は一段と強く言ひ放つた。「お給金の貯金がございますから、貴女のお恵みは頂きません。」

「オヤ、然うかい、それは感心だねへ、不要な物なら無理にとは言ひません

が、お金は幾等あつても邪魔にならぬものよ、瘦せ我慢を張らないで、持つてお行で、さあ。」と松代は紙幣を胸のあたりに軽く敲き附けた。

敲き附けられたお須賀は、紙幣よりも松代の顔を怨めし氣に、穴のあく程見上げた「奥様、貴女様はまあ、旦那様の御在世の時分とは、悉皆りお變り遊ばしましたねへ、折角剪つたお髪を、毎日綺麗にお上げて白い物をお附け遊ばして、斯うして始終お酒にひたつて、それで旦那様への義理が立ちまするか、女の操が立ちまするか」

「お黙り〜〜！、お前なぞに其麼ことを言はれる覚えはない。妻のお髪を綺麗に結ふと結ふまいと、お化粧をしやうと仕まいと、お前なぞの知つたこ

とぢやない、早く出てお行で、お前は暇を出されたのが口惜しさに、さう言ふ言ひ懸りをするのだらう。」と、松代は柳眉を逆立て、罵つた。

「はい、それでは最う申しません。」と、お須賀は主家を思ひ、熱い涙を流して「それほどまでにお心が腐つてお居でししたら、私が幾等申上げても、所詮耳へは這入りますまい。」

「愚圖々々言はないで、早くお行で、此所を何所だと思つて居るの、鶴川さんだから好いやうなもの、若し外のお客様だつたら、そのまゝぢや濟ましませんよ。」

「ねへ奥様、旦那様が、嘸かし彼の世でお泣き遊ばしてございませう。それ

では最う私は参ります。」

「お行き！、妾の心配なぞしないで、自分が野垂死にしないやうに、好く氣をつけてねへ。」

「假令野垂死はいたしましたしても、決して御迷惑はかけません。その變り、貴女様も親娘の愛情がありましたら、萬望お嬢様を豺狼の餌食に遊ばさないで、お望みを叶へて上げて下さいませ。」

定夫の話を聞いて居た泰輔は、忌々しさうに松代を振り返つた「大部松代さん。圖々しい婢ですわねへ、まるで主人を舐きつて居る。」

「これなんですからねへ、最う以前から暇を出したいと思つて居たのですけれ

ど、斯麼者でも永く居るものですから、遂そのまゝにして……、さあ早く行つておしまい。」と、松代は痲癩を起してお須賀の胸をドンと突いた。参ります、参ります、お嬢様、最う乳母は参ります。」と、堪りかねたやうに手拭を顔に押し當てた。

「乳母や。」梅子はつとお須賀に寄らうとした。

「これ、お前は何故お客様のお對手をして居ないの。」と、松代は前に立ち塞がつて「早く行かないかね。」と、言ふが否や又お須賀の胸を突いて、境の襖を手早く締め切つた。

眞の親母にも只ならぬ二女が、襖の内と外で、深刻なる生別の悲哀！

〔五〕

その夜は、十二時過ぎまで呑み更かした。松代と泰輔は殆んど毎夜なので珍らしくもないが、今夜は初めて定夫と、梅子があつたに、幾等か賑やかに十二分の酔が廻つた。

「最う妾、お酒は御免ですよ。」と、墮落姿のない格好で、松代が鶴川の膝に寄りかゝつた頃には、追がの鶴川も定夫も赤い顔をして居た。嫌やな酒を無理に呑まされた梅子に至つては、苦しみの餘り、俯伏しになつて肩で息をして居た。「さあ、皆大抵参つたやうだから、最う寝るとするかね、ねへ、松代さん。」と

泰輔は松代の肩口を揺つて「莫迦に今夜は屁垂れたね、松代さん。」

「ア、好い心持だ、好い心持に酔つちやつたわ。」

「好い心持もないもんだ、他人に倚かゝつて、最う寝やう、さあ起きたく。」

「寝るの！、嬉しいわねえ。」と、松代は甘つたれたやうに鶴川を見上げたが、

泰輔は定夫や梅子の手前を思つて、私かにそれと目で知らした。

「ア、好い氣持に酔つた。」と、松代はやうやく起き直つて「梅子、梅子、お前も酔つたの。」

「お母様、ア、苦しい、酷いわ、無理に吞ませるんですもの。」

「ほゝ、ほ、ちや早く寝んで、定夫さんに介抱してお貰ひ、今日から定夫さん

はお前の良人、ねへ、好いかい。」

「エ、ツ、お母様。」と、梅子はほろりと涙を流した。酒に酔ひ潰れた顔は、恐ろしいほど青かつた。

「如何したの、耻かしいの、最うお盃もしたのぢやないか、妾ばかり困らせないで、定夫さんに駄々をこねておやり、ほゝ、ほ。」

定夫は酔つた顔を、態とらしく他に向けて居たが「酔ばらつて居るんですよ、冷たい水で、顔でも洗つたら好いかも知れませんか。」

「然うだく。」と、泰輔は直ぐ定夫に同意した「顔でも洗つて見るが好い。さあ松代、老年は却つて邪魔だ。」

松代は無言のまゝ、泰輔を微笑と見上げて、手を取られながら去つた。

梅子も無言のまゝ、フラ／＼する足を踏みしめながら立ち上つたが、定夫はその手を取つて「梅さん、一人ぢや危ない、さあ、僕の肩に寄りかゝつて、顔を洗へば直ぐ酔が醒めるですからねえ。」

「イ、エ、妾、大丈夫ですから。」と、梅子は振り切らうとした。

「大丈夫でも好いから、兎に角寄りなさい、ねへ梅さん疵でもしたら、大變ぢやありませんか。」

「關ひませんわ!。」

「其麼莫迦な、強情張るものぢやない。二人は最うお母様のお許が出た夫婦な

んだから、好いぢやありませんか。二三日内に又お母様のお許を得て、何所か遠くへ遊びに行きませう。ねへ、米國なぞぢや、怎麼貧乏人でも、新婚すると屹度旅行するです。新夫妻の旅行は、全く天國ばすからねへ。」と、定夫は昵と顔を差し覗いて赤黒い唇を押し附けやうとした。

「何をなさるのですか。」と、梅子は矢鱈に定夫の顔を掻き退けて、肩にかけられた手を振りもぐや否や、自分の部屋の方へ走つた。

「危い、危いですよ梅さん。」と、定夫も脊後から梅子の部屋へ行つて、執念く肩へ纏い付いた「梅さん、貴女とは、今日初めて會つたのですけれど、僕は叔父さんから貴女の事を聞いて、一日も早く結婚したいと思つて居ました。」

貴女も何れお聞いたでせうが、僕は市俄古大學で法學士の肩書を買つて、歸朝したばかりの駄け出しですけど、今に大事業がしたいと思つて居ます。それにしても、差し當つて、内助の妻が必要ですからねえ、叔父さんは然う思つて心配してくれたり、お母様も既に二人を夫妻と認めてくれたのですから、今更僕の接吻を拒むのは怪しからんぢやありませんか。貴女はお母様のお言葉に反く積りですか、結局僕が嫌やなんですか。』

「妾、亡父様のお言葉に従はなきやなりません。』と、梅子は涙を流しながら、斷然と言ひ放つた。

「亡父様の、亡父様が何と仰有やつたのです。エ、梅さん、貴女のお父様は、

僕の叔父さん、イヤ僕の叔父さんは淺倉家の爲めには随分盡して居ます。その叔父さんや、現在生きて居るお母様のお言葉に随はなくつても、貴女は好いと思ふのですか。亡父様は、お母様の言葉に反くやうにと仰有つたのですか。』

「……………」

「ねえ梅さん、眞逆然うは言はなかつたでせう。エ、梅さん。』

梅子は何といはれても、俛首いたまゝ、堅くなつて居た。で、定夫は猶ほも言葉を續けやうとしたが、誰やら座敷の方から來るらしい蹠音がしたので、少し離れて様子を窺つて居ると、女中のお勝が襖の外から聲をかけた。

「お嬢様、お嬢様。」

けれど梅子が返事をしなかつたので、襖を開けて「オヤ、若旦那様も此室でございましたか。」と、驚いたやうに言つた。松代のお氣に入りだけあつて、最う如才なく定夫を若主人と呼んだのである。「先刻から随分お探し申したのでございますよ。」

「何か要かね。」定夫もお勝の心持が嬉しかつたと見へて、十年の主従でもあるかやうに、軽く問ひ返へした。

「エ、イ、エ、お嬢様のと一緒に、お床を延べて置きましたから、早くお寝みなさいませ、最う一時でございますよ。」

「然うかね、では……。』と、定夫はお勝の目配せに従つて、座敷の方へ去つた。

「お嬢様、貴女も早くお寝みなさいませ。」

「お勝。」と、梅子は口惜しさうにお勝を睨んで「妾、寝ないのよ。」

「まあ、何故でございます。奥様が、然うするやうにと、お伝附け遊ばしたのでございますか、其處ことを仰有つては、勝が困りますわ、早くお寝みなさいませ。」

「好いから、打ちやつといておくれ。」梅子は終に痲癩を起した。眼には涙を一
杯溜めて居る。

「だつてお嬢様、勝が困るぢやありませんか、ねえお嬢様。」

「……………」

「ねえ、お嬢様……………」

「五月蠅いわよ、早く彼方へお行で。」と、身悶して机に俯伏した。

「困りましたねへ。」と、お勝は迎も容易に説伏けることが出来ないと思つて、呆れたやうな目つきで昵と梅子の脊中の邊を瞞めた。

「ア、頭腦が痛い、手拭を絞つて持つて来ておくれ。」

「酒の爲でございませう。」

「……………」

お勝は止むなく立ち上つて、不精無精勝手の方へ出て行つた。梅子はその邊

音を俯伏したまゝ聞いて居たが、直ぐ思ひ出したやうに、「乳母は、何家に居るかしたら、乳母より外に、妾の心を察してくれる者はないわ。」と、言ふともなく呟いた。そして、堪らないほどお須賀に逢ひたくなつた。逢つて今日の事状を話して、後々の力になつて貰ひたくて堪らなかつた。それより外に、好い方法はないと思つて、いつそ家出して…………と思ひ付いた。世間見ずのお嬢様育ちではあるが、斯う思ひ付いたら矢も楯も堪らない。お勝が再び来ない間にと、殊勝にも強い決心を持つて、座敷の方から縁側へ出て、轟く胸を抑へながら静かに兩戸を外して庭に下り立つた。

〔六〕

勝手へ行つて、手拭を濡らして来たお勝は、梅子の姿が見へぬので、便所だとも思つたのが、直ぐ縁側の方へ行きながら、「お嬢様……。」と、聲をかけて見た。けれど梅子の返事がなかつたので、便所の戸を敲いて見たが、無論居る筈のない梅子の返事はしなかつた。

お勝は少々不審に思つて、若しや定夫の座敷に……と、行つて見たが、其室には定夫が一人梅子の来るのを床の中で待ち兼ねて居た。寢音がしたので、多分梅子だと思つたのだらう。お勝の顔を見て、失望したらしかつた。

「お嬢様は……居らつしやいませんのねへ。」と、お勝が妙な顔をして室内を見廻すと、

「如何したんだね。」と、定夫も起き上つた。

「今、手拭を濡らして来てくれと仰有つたから、お勝手へ行つてる間に……何所へ行らしたのでせう。」

「部屋に居ないのかね。」

「エ、お部屋にも便所にも、居らつしやらないのでございますよ。」

「フーン、如何したんだらう。」と、定夫は心配さうに言つた。そして、若しや娘氣の思ひ詰めて——と思ひ付いたので、さつと顔色をかへて立ち上つた。

「妙だねへ。」と、お勝と一緒に縁側へ出て見た。すると、如何やら雨戸が一枚外れて居るらしいので、その方へ近付いて見ると、果して戸が外れて居た。

「ヤ、戸が外れてる。これや大變だ。」

「まあ、貴方早く、出て見て下さいませ、私奥様にお知らせいたしますから。」

お勝は慌て、バタ／＼と松代の部屋へ駆け込んだ。松代は泰輔と床を列べて、好く寝入つて居たが、お勝の只ならぬ寤音に驚いたと見へて、寢巻け眼を

パツと開けた。

「奥様、奥様、大變でございます。」

「如何したの。」

「お嬢様が、居らつしやいませんでございます。」

「梅子が……」と松代は道に驚いて飛び起きた。

「如何したんだらう。」と、まだ幾等か寢巻けて居る。年は取つても、俚諺にいふ四十島田の返り咲き、お化粧の行き届いた顔に、黒々とした後毛の纏れたのを、五月蠅氣に搔き上げる姿は、まだ捨てがたき風情であつた。

「梅子には困つたねへ。」と、泰輔も起き上つて、寢衣のまゝ松代と一緒にお勝に踵いて縁側へ出た。

「定夫は如何した。」

「若旦那様も、探して居らつしやいます。」

「一體、何時頃出たんだ、餘程経つて氣が付いたのか。」

「イ、エ、遂先刻なのでございますよ。まだ二十分位しか経ちません。」

「然うか。」と、泰輔と松代は、稍や安心して、それなら早く探せば解らないこととはあるまいといふやうな色が見へた。お勝に履物を庭へ廻さして、三人は急いで庭へ下りた。門へ行つて見ると、脇の潜戸が明けツ放しになつて居るので泰輔は先づ一番に表へ出た。

すると、一丁ばかり向ふに、黒い人影が見へたので、泰輔は急いで近付いたが、それは失望と不安に茫と突ツ立つて、固く腕組みして定夫であつた。

「定夫か?。」

「エ、。」

「梅子は……?。」

「居ません。」

「困つたねへ、心配ばかりかけて、仕方のない娘だ。」

「梅さんは、僕と結婚するのが嫌やだつたのでせう。叔父さんが是非と仰有るものだから、遂その氣になつて……。」

「ナニ、然ういふ譯でもあるまいがね。」と、泰輔は譯もなく打ち消した。

「餘り突然だつたから不可ないのさ、少し馴染んでから言へば無論承知するんだつた。」と、是れは泰輔が女に對する常の見解で、彼れは此見解を以つて、

是れまで大抵の女と關係して來た。少くとも、馴染にさへなれば、怎麼女でも關係出来るものだと思つて居るのである。

「何しろ困りましたねへ、若し間違ひでもあつたら、取返しが付きません。」

「それだよ、世間見ずの娘だから、一人では逆も如何することも出来ないから思ひ詰めて怎麼ことをするかも知れない。まあ好く探して見るより外に仕方がない。」と、泰輔は一通ならず心配して、足早く四圍一帯を隈なく探したが夜が明け放れる頃まで探しても、終に梅子の姿は見へなかつた。

「眞逆と思つて、氣を弛したのが悪かつた。梅子は最う、何所かで死んで居るでせう。」と、松代は追がに恩愛の涙にくれた。泰輔が是非梅子と定夫を夫婦

にして、親戚關係を結べば、世間へ晴れて、自分が出入することが出来ること切望したので、終その氣になつて無理に押し付けやうとしたもの、内心では今更それを悔いて居たが、元々泰輔に心を奪はれて居る松代は、苦情がましい事は言ひ得なかつた。

「さあ、眞逆其處こともあるまいと思ふがねへ、兎に角、親戚をそれとなく尋ねて見たら、外に行く所がないから、或は行つて居るかも知れない。」

「然うですねへ、行つて居てくれれば宜しいが。」と、早速お勝を走らせて見たが、松代の里へも姉の家へも行つて居なかつた。此上は警察署へ保護願を出せば出すのだが、それも外聞を思へば如何やら届け出ることも出来なかつた。

「若し、乳母やの家へ行つて居やアしないかねへ。」
 「イ、エ、知つてる筈ありませんわ。乳母やも此家を出れば、差し詰め行く所がないのですから。」

「フム、然し、何家か、心安い家とか、何かないことはない筈だ。」

「然うですなへ、然う言へば、淺草の須賀町とかに居る、女髪結さんと懇意にして居たやうですわ。」

「然うか、では其家だらう、屹度其所に相違ない……。」

淺草の須賀町知らないかね、淺草橋と厩橋の中ほどだ。御苦勞だが定夫、一走り行つて様子を調べて見てくれ。」

「然うですか、では。」と、定夫は直ぐ立ち上つた。嫌やがられるほど暮るのは戀の常、定夫は一日見た時から梅子の美容に心を奪はれて居たが、斯うなつてからは一層戀しさがまさつて、顔にこそ出さぬが、母親の松代よりも泰輔よりも、より以上梅子の身の上を案じて居たのである。
 華美な合服に朱靴を穿つて、銀柄の洋杖を小脇に挟みながら洋行歸りを氣取つた歩調で、とつかわとして出て行つた。

〔七〕

お勝が勝手へ行つた隙に、弗と思ひ着いて雨戸から眞暗い庭に降り立つた梅

子は、今夜を限りの我家かと思へば、追に振り返へつて涙を流さずには居られなかつた。幾等母娘の情が薄いにしても、身肉の母を捨てる恐ろしさ、我ながら不孝者と悲んだが、去りとして今更躊躇して機を失つては、心にもない定夫に身を汚されるのみならず、亡父に對して申譯なく、ひいては實様に對して申譯がないと決心して、足音を聞き付けられぬやうにと、後方を振り向きながら静かに門まで歩み寄つたが、小娘の身には持ち兼ねる巖丈な門をやつと外して表へ出た。

空には銀砂を撒いたやうな星が、青白く静に光つて居るのみ、下界は足下も見への鳥羽玉の闇、夕方からはついぞ一人で外出したことはない身は、恐ろ

しいやら心細いやら、一步を歩み出すさへ途方に暮れたが、思ひ詰めた一念に怖い紛ざれの早足、靖國神社の方へ急いだ。

と、一臺の俵が蛇の這ふやうに音もなく、ぼうとした提燈の光線を輓いてブラ／＼近付いて來た、此の寢静つた街に、我より外に人ありと思へば、それでも多少氣強いやうに思はれた。俵夫は摺れ違ひながら梅子を透すやうに見て、『行きませうか。』と立ち止つた。

『エ、』と、梅子も實は望みであつた。

『何方までいございます。』

『然うねへ、あの、三の輪まで行つてもらへないの。』

「へエ三の輪ですか。然うですなへ。」と、車夫は稍や躊躇するやうに言った。年若い娘が、此夜更けに一人歩くとは、何か意味があるだらうと思つたらしく暗いながら梅子の姿を贖めて居たが、

「宜しい、参りませう。遅くなつて、三の輪までとは大變ですなへ。晝間なら電車で行きや譯きやありませんが、斯麼に遅くなつて電車はなし、大變でさアね。」と、車夫は楫棒を下して、梅子の膝を包みながら愛想よく言つた。聲の様子では、四十ばかりの車夫らしい。梅子は吻とした。

「三の輪は、何邊ですか。」

「橋の少し向ふなの、橋があるでせう。」

「へエ、三の輪橋、ございますよ。」

車夫は走りながら種々なことを話かけたりした。何となく氣の置けない男で便通とする者が一人もない梅子には唯一の味方のやうに思はれた。救ひの神のやうに思はれた。物の一時間ばかりも経つたかと思ふ頃、如何にも場末らしい廣い街を走つて居たが、軒の灯が疎なので、物凄くいほどの邊は淋しかった。春とは言ひながら、毛穴へ泌み込むやうな深更の涼しい風が、威嚇するやうに時々吹きつけた。梅子は幾度も身顛ひした。

「車夫さん、まだなの？」

「へエ、最う直ぐで……。」と、車夫は苦しいと見えて額の汗を拭きながら、無

愛想に言つた。そして、一層淋しい暗い細い街へ折れて、又二三十分も走つた梅子は固より方向も何も解らなかつたが、終に街の家並を開放れて、右も左も廣々とした田圃らしい所へ來たので、始めて不審さうに眉をひそめた。

「車夫さん、まだなんですか?」と、稍や自裂つたさうに聞いた。

「へエ、へ……。」と、車夫は妙な笑を浮べながら、足を緩めて車上の梅子を見返つた。

「道が違つたのぢやないの。」

「冗談言つちや不可ねへ。幾等血迷つたからつて、道を違へて堪るものかね。」
 「困るわ妾、斯麼とこぢやない筈だわ。」梅子は我と我身に吐いて、泣き出しさ

うに戦慄いた。

「大丈夫ですよ。夜道に日は晚れねへ、此所等で一服しやうかね。」

「不可ないわよ。早く行つて下さいよ。ねへ、お金は幾等でも上げますから。

早く、ねへ車夫さん。」と、梅子は俄かに變つた車夫の態度に驚いて、飽くまで物知らかに頼むのであつた。

「然うお前さん、一息に走らされた日にや、如何な私ちでも參つてしまひませあね。さあ、下車て一服つきあつて下せへ。」と、車夫は膝掛を剥ぎ取つて、しつとりと露を含んだ草の上に敷いた。

「さあ、下車ねへつたら下車ねへ、幾等お前さん、お邸育ちのお嬢さんだつて

大抵此所まで来りや解りさうなもんぢやねへか、一體此所を何所だと思つて
 るんだい。真直に十丁ばかり行きや日暮りの火葬場で、滅多に人の通る所ぢ
 やねへ、然かも斯麼夜更けに誰がお前見るものか、さあ、下車て綽然自由に
 なりねへ。』と、纖弱い梅子の手を引いた。

『まあ、嫌やよ、嫌やですよ。堪忍して下さいよ。』

『は、は、泣くほど怖いことはしねへよ、さあ下車ねへか。』

節瘤だつた巖丈な荒くれ男に引かれて、一溜りもなく梅子は抱き下車され
 た。

『嫌やよ、嫌やよ、誰か来て下さいよ。』と、泣き聲を立てたが、街を離れた田

甫道なので聲は空しく遠くへ消へ去るばかり、身を藻掻いて振り切らうとして
 も、驚に攫まつた小雀同然。

『静かにしろい、最う斯うなつてからにや、幾等騒いでも逃しつこねへんだ、
 静かにして、従順に自由になれ。』

『そればかりは、そればかりは、嫌やですから免して下さい。免して下さい
 いよ。嫌やですよ、嫌やよ、誰か来て、誰か来て下さいよう。』

梅子は聲を限りに叫びながら、必死になつて抵抗したが、悲しや女の細腕、
 殊に嬢様育ちの纖弱ひ身、然かも、敵は鬼をも挫ぐ荒くれ男である。到底腕力
 で及ぶべき筈はない。

〔八〕

前門の餓虎後門の狼、定夫のために危く童貞を踏み躪られんとした梅子は、
今又無頼の車夫のために、落花狼籍、石よりも堅い操を破られんとしたが、運
よく日暮里の牧場から歸る牛乳屋が、ガラ／＼と箱車を轆いて、田甫を吹く夜
風を浴びながら、一散に勢よく通りかゝつた。

車夫は田甫中と氣を許して、獸慾を遂げんとする一心と、梅子の騒ぎで車の
音が耳に入らなかつたが、牛乳屋の方では道端の俵が邪魔になるので、四五間
手前から闇を透して、いよ／＼それと知つて、直ぐさま車を轆き捨て、悲鳴の

方へ駈け寄つて、今や落花微塵といふ矢先きを、唐突横合から車夫を突き退け
た。

突き退けられた車夫は、怒るよりも先づ驚いた。直ぐ起き上つて逃げやうと
したが、始めて牛乳屋であることを知つて。

「ヤイ、巫山戯た真似をしやアがつたな。此野郎！」と、拳を固めて打つてか
かつた。

「ナニ！、巫山戯た真似は貴様がしたんだ。」と、牛乳屋も負けては居なかつた
白のジャケットに半洋袴の身軽い姿で、小敏しく車夫の拳を轉すが否や、ムツと
組み付いて鮮かな柔道の手で投げ付けた。後ろに小さくなつて居た梅子は、思

はず物とした。

「さア来い。」

「投げアがつたな野郎。」と、車夫はまだ懲りすまに打つてかゝつた。

「貴様のやうな奴は、ふん縛つて警察へ突き出してやる。不都合な奴だ。」と、牛乳屋はまた物の見事に投げ付けて、隙さず車夫に乗りかゝつた。車夫は必死になつて、組み敷かれながらも打ちつ蹴りつした。

「此野郎、まだ抵抗するか。」と、牛乳屋も上から散々に殴り付けた。その内如何した機會か、車夫は牛乳屋を蹴上げて、矢庭に飛び起き、一散に俵の方へ走つた。

「はゝゝは、口ほどにない弱い奴だ。」と、牛乳屋は笑ひながら追ひもせず、一散に逃げる車屋を見送つた。

梅子は先程から殆んど夢見心地で二人の鬭争を見て居たが、運よく牛乳屋が車夫を追ひ拂つてくれたので、嬉しさに我を忘れて牛乳屋に走り寄つた。

「如何も、有難うございました。」

「イ、エ、何所も怪我をしませんでしたか、あゝいふ悪い奴が居ますからねへ迂濶に俵にも乗れませんよ。一體斯麼な時刻に、何所へ行らつしやるのですか。」

「あの、三の輪まで参らうと思ひまして。」と、梅子は見えぬながら、牛乳屋の

顔を透すやうに見上げた。

「へエ、三の輪の奈邊ですか。」

「あの、好く存じませんのですけれど、橋の少し向ふとか聞きましたから、お尋ねしやうと思ひまして。」

「橋の向ふと言ふと、三の輪橋でせうねへ。僕も實は三の輪橋の近くの者ですが、何といふ家ですか。」

「あの、内田といふ家なんですけれど……。」

「エ、ツ、ちや貴女は梅さんちやありませんか。」と、牛乳屋も顔を透すやうに梅子を覗いた。

「内田の兄さんでしたの、まア。」

「梅さんか、何故また斯處に遅くなつて出て來たんです。最う夜が明けるぢやないか、僕が今一足遅かつたら、野獸の牙にかゝる所だつた。全く危険ですよ。何か又、變つたことでも出來たのですか。先刻から何だか梅さんのやうな聲だと思つたけれど、眞逆か梅さんが今頃斯處所に居やうとは思はないからねへ、一體如何したんです。」

「兄さん、妾、最う家へ居られなくなりましたの。」

張り詰めて居た心が俄かに弛るんで、梅子は堪へがたい悲しさに思はず聲をたて、泣いた。袖を顔に押しあて、堰き來る涙を抑へやうと努めても、それ

からそれへと悲しさが湧いて、暫らくは口も訊けなかつた。

内田の兄さんとは子供の時分から呼び馴れた懐かしい言葉である。亡父が此の世にある時分は、内田家はまだ盛んにやつて居たが、會社の破綻から急に家運が傾いて、家屋敷まで人手に渡り、英國へ留學中の總領の一郎へは學資が送れなくなり、歸朝する路費さへ送れなくなつて、そのまゝ異郷で辛酸を嘗めて居るやうな有様、當時實は一高に在學中であつたが、これとても勉強を繼續し得ぬばかりでなく、父の宇内を腕一本で養つて行かなければならぬことゝなつたのである。

此悲運に陥つた内田家に對して、松代は非常に冷淡であつた。のみならず、

亡父と宇内が堅く約束した實と梅子の許嫁まで非認して、足繁く出入する實に好い顔を見せなかつた。それが段々切じて、後には面と向つて罵つたことさへあつた。

斯うして淺倉家と内田家は絶交の姿となつた。三の輪へ引き起して小やかな牛乳屋を開業したことも松代は一切知らなかつた。梅子もよもや知る筈はないと思つて居たが、兄と呼び良人と思つて居た梅子は、雲煙過眼と冷靜に構へて居ることは出来なかつた。母にこそ言はぬが、人目にこそ涙を見せぬが、絶へず思ひ煩ふて、陰ながら乳母のお須賀に様子を探らせて、やうやく三の輪に居ることだけは知つて居た。で、定夫の一件が起るや否や。懐しい實に逢つて、

相談したいと思つて居たのである。

「何故、何故家に居られなくなつたの。」と、實はいたましさうに寄り添ふて、袖を顔に押しあてた梅子の脊中を軽く撫でながら、昔しながらの優しい言葉で訊いた。それが又、一段と梅子の悲しさとなつた。

「兄さん。」とばかり、實の腕に縋り付くやうにして、涙ながら昵と顔を見上げた。

「お母様が、結婚しろと仰有いますの。」

「結婚を、それや何時までも一人で居る譯には行かないですからねへ、お母様の仰有るのも無理はない。」

「エ、ツ、ちや兄さんも、兄さんも結婚しろと仰有いますの。」

「ナニ、僕は、勧めも、止めもしない。僕には然ういふ権利はないのだからねへ。」

「イ、エ、有つてよ、有つてよ、妾、亡父様の、亡父様のお言葉を、どこまでも守りたいと思つて居ますのよ。ねへ兄さん。」

「有難う、然う思つて居てくれたのは有難いが、今日の場合、それは梅さん、逆も實行出来ないことだよ。ねへ、目下の浅倉家と内田は、以前とは些と事情が違ふからねへ。」

實は努めて冷静に、慰めるやうな口調で言つたが、悵然としたその態度に、

断腸の苦悶が隠しきれなかつた。冷や、かな表面から熱い愛情が燃え出るやうな風情があつた。

梅子は又袖を顔に押しあてた。

「ちや兄さんは、妾を、妾を最う捨てたのねへ。」

「イヤ、然ういふ譯ぢやない……。」

「イ、エ、然うよ、然うよ、亡父様のお言葉に反いて、あんな人と結婚するほどなら、妾、妾、死にますわ。死んで亡父様のお側に参りますわ。」

「莫迦を言つちや不可ん。幾等小母さんだつて、本統の梅さんのお母様だから然う無茶なことをする氣遣はない。ねへ、最う一度家へ歸つて、好く相談し

てごらん。」

「駄目よ、お母様は最う、全部鶺鴒さんに騙されて居るのですから、何といつても聞いては下さりません。」

「鶺鴒にねへ。」と、實は堅く思案の腕を組んだ。

「彼奴は全く善くない奴だ。結局彼奴が居るからお母様の心が變になつて居るんだ。一體その結婚しろといふ男は何者だね。」

「鶺鴒さんの甥なんです。」

「鶺鴒の、それは不可ない。矢張り小母さんは騙されて居るんだ。」

「兄さん、妾、如何したら好いんでせうねへ。」

「然うさねへ、僕も實は、此儘梅さんを家へ歸したくないよ。」

「兄さん、萬望ねへ。」

「梅さん！」

幼な馴染の男女は、つと寄り添ふて堅く手を取り交した。亡き父の靈は何所夜はほのくくと明け渡つて、天王寺の森は灰色の霧に遠く煙り、黎明の空に一羽二羽、樂し氣に鴉が啼き渡つた。

〔九〕

「ヤア、遅くなつてしまつた。」と、實は始めて明くなつたのに氣が付いたやう

に空を見上げて「兎に角僕の家へ行つて、お父さんにも好く御相談して見やう。」

「濟みませんでしたのねへ。」

「ナアニ、只だね、僕は以前のやうに暢氣に遊んで居られない身體なんだから困るのさ。」

「大變ですわねへ。」

「梅さんは此所から歩けるかね、まだ大分あるよ。」

「歩きますわ。」

「では、途中で又俵にでも乗るとして、少しの間歩いておくれ。」

「エ、。」

「さあ、早く行こう」と、實は手を取つて、轆き捨てた箱車の楫棒を上げた。

「走つても妾 踵いて行きますわ。」

「は、は、は何が走れるものか、僕は毎朝、日暮里の牧場から一時間かゝらないで三の輪へ歸るんだからねへ。」

「大變遅くなつて、お父さん、何とも仰有らないでせうか？」

梅子は楫棒に絶つて、小走りに踵いて行きながら、心配さうに言つた。

「ナアニ、お父さんは商業上の事には關係ないんだからねへ、僕が一人で梅さんやつてるんだ、自分一人の腕で生きて行くといふことは、なか／＼面白

いことだよ。」

「然うねへ、でも大變でせう、妾お手傳ひしたいわ。」

「莫迦をいつてる、梅さんに車が轆かれるものか、それこそ、美人の牛乳屋なんて早速新聞種だ。」

「まあ、美人ぢやないわ。」

「ぢや何さ、妙齡の牛乳屋とでもいふだらうよ。」

「イ、エ、妾、小母さんがお亡くなりになつたから、御飯を拵へるのが大變でせうと思つて……、誰が焚くの矢張り兄さん？」

梅子の心配は、矢張り女らしい心配であつた。

「御飯か、全く面倒だねへ、梅さんがやつてくれると助かるがねへ、」

「妾お三どん、してよ。」

子供時代からの仲好の二人は、打ち解けると矢張り子供のやうに、遂ひ無邪氣なことを言ひ勝ちであつた。先刻の悲しさは最う忘れたかのやうに、笑ひながら下らないことを話して、思はず知らず街端の家並へ通りかゝつた。實は行く手の駄菓子屋の軒下に、俵が一臺あるのを見付けて、早速それを雇うことにした。

「好いのよ妾、好いのよ、最う直ぐなんでせう、妾歩くわ」と、梅子は慌て、制した。

「大丈夫だよ、今度は僕が附いてるから、早くお乗り、遅くなると困る。」

「然う、妾好いんですけれど……」

同じ楫棒に縋つて、どこ迄も一緒に行きたいのが梅子の望みであつたが、遅くなると言はれては、強いて拒みも出来ず、不精無精に車上の人となつた。

車夫は五十餘りの人の好きさうな奴、實はそれを追ふやうに、背後からガラ／＼凄まじい箱車の音を立て、走つた。梅子が氣の毒さうに見下す顔と、時々見交して笑を浮かべながら、間もなく三の輪橋を過ぎて、牛乳屋とはほんの名ばかりの、實父子の佗住居へ着いた。

父の宇内翁も既に起きたと見へて、硝子戸へ張つた幕が半ば外してあつた。

「一寸お父さんに話して見るからね、店へ這入つて腰を掛けてお居で」と、實は内へ這入つて、梅子に一脚の古椅子を勧めた。その物音を聞きつけた宇内翁は、實の歸りが遅いのを案じて居たと見へて、

「實か」と、奥から大聲で聞いた。

「はあ、僕です、遅くなりまして……」と、直ぐ實は上り框へ腰をかけて、跣足袋を脱いだ。

「餘り遅いもんぢやから、何か間違ひでも出来たのかと思つて心配して居た所ぢや」と言ひながら奥から出て來た、古袷に細い帯を締めて、昔に變る見窄らしい風采。自からも誇り他人も羨んだ白髭さへ、今は灰色に汚れて居た「何

をして居たのぢや。」

「はい、一寸途中で暇潰しをしましてね」と、道かに實は言ひ淀んだ。常から頑固な父の性癖を知つてるだけに、果して梅子に同情を寄せてくれるか如何かと、顔を見ると今更のやうに躊躇された。で梅子の姿を見せぬやうに、父の前に立ち塞がった。

「間違ひさへなければ好いが、様子が解らんもんぢやから氣に掛つて、その邊まで出て見やうかと思つて居た。」

「如何も、御心配をかけて済みません、實はねへお父さん、途中で大變な間違ひがありましたねへ。」

「如何したのぢや。」

「何日もの通り、火葬場の通りを真直に歸つて來ますと、車夫の奴が、若い婦人を捕へて怪しからん振舞をしやうとして居るんです。で、僕は早速その車夫を二三度投げ付けて、その婦人を助けてやりましたが、話を好く聞いて見ると、その婦人は、娘ですわね、實に氣の毒な境遇なのです。」

「フーム。」

「家は立派な、中流以上の資産家なのですが、父親が亡くなつて母親と二人暮しださうです。所が其の母親が如何も心懸が善くない女で、男を引き入れて毎日不義の淫樂に耽つて居るのださうで、茲に氣の毒な事には、その娘には

まだ父親が在世中に、或家の息子を貰つて娶すことに約束が定つて居たのです。結局許嫁があるのですわね、然るに母親は情夫に迫られて、その情夫の甥とかを養子にしやうとしたのです。無論強行的に、嫌や應なしに娘を結婚させやうとしたのです。で娘は、母の言葉に随つては、亡父に對して濟まず許嫁の男に對して申譯がないと思ひ詰めて、夜中密かに殊勝にも家出して、許嫁の良人の所へ行かうと、俵を雇つたところが、その車夫の奴が不埒な奴で、約束の方向を枉けて田甫中へ輓いて行つた譯なんです。僕は可愛想に思ひましてねへ……」

と、實は父の顔色を窺ひながら熱心に物語つた。

「さうか、そりや好いことをした。世の中には随分氣の毒な人が多いものだ。」
 「ぢやあの、お父さんも同情してやつて下さいませうか。」
 「同情する、然しこの實、今の身分では他人を助けることも出来なくなつた。」
 「イヤ、同情してやつてさへ下されば、怎麼に喜ぶことでせう」實の聲は心の底から流れ出たやうであつた。店で凝と様子を聞いて居た梅子は、有難涙に思はず聲を出して泣いた。

「そして、お前はその娘を連れて來たのか」と、泣き聲を聞きつけた宇内翁は不審さうに實の顔を瞞めて居たが、直ぐ店を覗いて梅子の姿に目を止めた。

「小父様」と、梅子は涙ながら駆け寄つた。

「オ、」とのみ、宇内翁は脅へたやうに呻めいて、三四歩背後へ身を退いたまゝ、言をもいはず昵と實と梅子を睨み詰めた。

「お父さん、萬望同情してやつて下さい」と實は眞心をそのまゝに訴へた。けれど宇内翁は答へもせず、猶ほも昵と睨み付けて居たが、痙攣的に白髯を顫はして、

「實！」と、鋭く口を開いた「貴様は、一婦人の愛に引かされて、儂の面を踏み躪る氣か。」

「イ、エ、然ういふ譯ぢやありませんが、梅子さんの心中を推し量つて……」
 「莫迦を言へ、貴様は、淺倉家が此儂に對して、貴様に對して、侮辱を加へた

ことを忘れたか、淺倉重臣は儂の莫逆の友だつたが、今の淺倉松代は儂の敵ぢや。

「はい、それは好く存じて居ります、けれど、梅子さんには、何にも罪はないのですから、」

「莫迦奴、貴様も家へ置くことはならん、出て行け、今貴様が梅子を庇護て見ろ、あゝいふ不心得の女だから、誘拐だなどと言ふに定つて居る、それ位のこと貴様には解らんか、今改めて儂から許嫁の約束は取り消す。」

「エ、ツ」と、實と梅子は同時に驚きの顔を上げた。犯しがたい父の決心を、言ひ説くべき言葉もなく、實は鉛のやうな重い吐息、梅子はたゞ泣より外な

つた。

案に相違の宇内翁の言葉、一旦言ひ出したからには、是が非でも言ひ通さなければ止まない性格を知つて居るので、實は重ねて言ふ勇氣もなく、太い溜息を吐きながら泣き入つた梅子を見返つた。

「お父さんの仰有る通りだから、一先づ梅さん家へ歸つて、好くお母様に相談して御覽なさい、何といつても本統のお母様だから、然う悪いやうにする氣遣はない、怎麼人間だつて、我子の可愛くない者はないんだからねえ。」

『はい』と、梅子は顔を抑へたまゝ、微かな返事、宇内翁は男女の話を撫然として聞いて居たが、

『實、お前は早く配達に出なさい、家業を等閑にしては忽ち我々の生命に關する。お前はまだ他人の事なぞ心配する資格はないのぢや。』
と言ひ捨て、白髯を扱きながら奥へ行つた。

『はあ、では、直ぐ行つて参ります』と、實は背後姿を見送つて、又梅子と顔を見合せた。

『兄さん。』

『困つたねえ、僕は歸へしたくないが、お父さんの言つたことも全く道理だ。』

『妾、如何しても、如何しても歸りませんわ。』

梅子は聲を呑みながら歎歎いた。

『其麼ことをいつては、僕が困るから、兎に角お歸へり、ねえ、お父さんから改めて許嫁の約束を取り消すと言つたからには、逆も最う梅さんとは一緒になられない、諦めるより外はないよ。』

『妾、妾嫌やです、嫌やですわ、貴方は、其麼に容易く諦められて、妾、諦められないわ。』

『事情によつては仕方がないさ。ねえ、到底實行されないことに苦心して、煩悶したり悲しんだりするのは、餘り褒られることではないよ。』

「だつて、だつて、妾嫌やです。」

「困るねえ、然う解らなくつちや、斯麼ことをお父さんに聞かれちや好くないから、兎に角出やう、ねえ、その變り梅さん、僕の心は、何時までも、死ぬまで、變りはないからねえ。」

實の言葉は興奮しきつた梅子の胸を抉るやうに沈痛であつた。

「萬望ねえ」と、梅子は絶り付くやうに、手を固く握つたが、實は慊すやうな表情で靜かに拂つて、身支度を整へて表へ出た。その男女の背後姿を宇内翁は障子の隙から見送つて居たが、實も梅子も氣が付かなかつた。

「まあ其邊まで一緒に行く、早く歸らないと、お母様が心配して居るよ、何れ

探し廻つて居ることだらう。」

「歸りたくないわ、何とか、好い考へはないものでせうかねえ」と、梅子はまだ躊躇して居た。實が勧めるから止むを得ず一緒に出たやうなもの、家へ歸る氣は少しもなかつた。妾、乳母の家を探してみませうか知ら。」

「然うだねえ、然し、乳母は家がないんだから、何家へ行つたか解らないだらう、何所か心當りでもあるかね。」

「心安い所があるのよ、其家で尋ねたら、解らないことないと思ふの。」

「フム、ちや訊いて見ても好いねえ、乳母なら、梅さんの心持を好く理解してゐるから、非常に都合が好い。」

實は實直な乳母が以前から好きであつた。且つ梅子と二人に對する唯一の同情者なので、お須賀に頼るのが一番双方の爲めだと思つた。

梅子は素より家へ斷じて歸りたくないと思つてる矢先、實の同意を得たので直ぐ堅い決心が出来上つた「妾、乳母の家を探しますわ。」

「何所？、その心安いといふ家は、」

「淺草の須賀町とかいふ所なの、髮結さんだから屹度解りますわ。」

「然うだねえ、ちや僕も一緒に探して上げやう、」

「好いのよ、一人でも解らないことないわ。」

「イヤ、又間違ひでもあつては困る。それに、家の方でも何れ梅さんを探して

居るだらうから、若し逢ひでもしたら大變だからねえ。」

「だつて、配達に行かないと、お父様に悪いわ。」

「好いさ、一日位休んだつて關はない、遂此先に知つた家があるから、其家へ車を預けて電車で行かう、須賀町なら然う遠くもない、」

男女は前よりも一層早足に、と或る煙草屋の店先まで来て、實は箱車を軒下へ預けた。

「牛乳屋さん、何か驕らなきや不可ないねえ」と、店に居た婆さんは氣輕さうに揶揄つて、昵と男女を見較べた。白のジャケットにコール天の半洋袴を穿いた實と、大柄な名仙に縮緬の中巾帯を締めた梅子は、對照の上に於て少なからず

人目を惹いた。然かも、實は眉のキリ、とした中肉中脊の色の白い男で、牛乳屋とは些と受取りにくいほどの人品、梅子は細そりとした奥床しい人柄、如何見ても不審は充分にあつた。

「ちや頼みます」と、實は眞面目に、簡単に頼んで置いて、程近い停留場まで急いで人形町行きに乗り込んだ、市内の地理に詳しいので、少しも麻胡附く様子もなく車阪で乗り替へて、間もなく須賀橋で下車た。

「まあ、随分好い所ですのねえ、髪結さんの家なぞないわ」と、梅子は街を左右に見較した。成程両側とも大きい店ばかりで、髪結の家なぞありさうにもなかつた。

「いづれ裏通りだらう、何家かで訊いて見やう。」
 「然うねえ、」

とは言つても、兩側の家に目を配りながら、とある横町まで来て、終に角の家で尋ねて見た。

「あるにはありますが、名が解らなくつちやねえ、此横町を眞直に行つて二ツ目の辻を右へ行つて、四五軒目の路次を這入つた所に一軒あります」と、四十ばかりの妻君が、梅子をぢろく見ながら丁寧な教へてくれた。で、男女は直ぐ其横町へ折れたが、丁度そこへ通りかゝつた電車の車掌臺に立つて居た洋服姿の若い男が、梅子の背後姿を見て直ぐ飛び下りやうとしたが、電車の速力

が早かつたので、そのまゝ行き過ぎた。男は無^{をとし}論^{ろん}定^{てい}夫^だであつたのだが、梅^{うめ}子^こは少しも氣^きが付^つかなかつた。

〔一〕

角^{かど}の家^{うち}で教^{おし}へられた通り、右^{みぎ}に折^をれて路^ろ次^ぢへ這^は入^いると、果^はして髪^{かみ}結^{ゆひ}の看^{かん}板^{ばん}が目に着^ついた。如何^{どう}いつて訊^きいたものかと、實^{みの}は考^{かん}へながら、その家^{うち}の前^{まへ}で立^たち止^どつた。そして、思^{おも}ひ切^きつて兎^とに角^{かど}入^いつた。

單^{たん}に髪^{かみ}結^{ゆひ}さんを探^{たづ}ねるのでなくつて、お須^す賀^がといふ者^{もの}と心^{こころ}安^{やす}い髪^{かみ}結^{ゆひ}さんを探^{たづ}ねるのだから、なか／＼問^とひ方^{かた}が面^{めん}倒^{たう}である。實^{みの}は仕^{しか}方^{かた}なく有^ありのまゝに、言^{こと}

葉^は數^{かず}を多^{おほ}くして訊^きて見^みた。すると、女^{おんな}主^{なし}人^{しゆじん}らしい女^{おんな}が、案^{あん}の如^{ごと}く妙^{めう}な顔^{かほ}をして實^{みの}をジロ／＼見^みながら、

「イ、エ、其^{その}麼^{んな}人^{ひと}知^しりませんよ、矢^や張^はり髪^{かみ}結^{ゆひ}さんですか」と、好^よく腑^ふに落^おちなかつたらしい。

「イ、エ、髪^{かみ}結^{ゆひ}さんぢやないんですが、その人^{ひと}と心^{こころ}安^{やす}い、髪^{かみ}結^{ゆひ}さんを探^{たづ}ねて居^ゐるんです、最^もう此^{この}邊^{へん}に、お宅^{たく}より外^{ほか}にありませんでせうか、」

「さうですねえ、一寸^{ちよつと}此^{この}所^{ところ}にありませぬえ、向^{むか}ふの横^{よこ}町^{まち}を河^か岸^しの方^{ほう}へ行^いつて、一^{いっ}ツ手^て前^{まへ}の横^{よこ}町^{まち}を一^{いっ}丁^{てう}ばかり行^いつた所^{ところ}に、一^{いっ}軒^{けん}あるにはありますがねえ、まあ訊^きいて御^ご覽^{らん}なさい、」

「さうですか、最う外にはありませんか、」

「ありませんねえ、」

「へエ、如何も名が解らんですから、少々無理な探し物なんで……」と、實は當惑したやうに、考へるともなく暫らく躊躇して居たが「ヤア、如何も有難う」と、其家を出た、何は兎もあれ聞いた通りに行つて見ることにして、

元來た横町へ引き返した。

と、梅子は弗と、向ふから來る定夫の姿を見て、立ち悚むやうに驚いて、實の陰に隠れやうとした。

「貴方、定夫ツて人が來ましたわ、」

「定夫?」

「エ、鶺川の甥の……」

「ウム、あの高襟がか、」

「然うなのよ、大變ですわ、屹度、妾が乳母の所に居ると思つて、探しに來たのですわ、如何したら好いでせう」と、梅子は青くなつて居る。

「如何もしなくつても好い」と、實は梅子を背後に庇護うやうにして、そ知らぬ顔で行かうとした。すると定夫は背後の梅子に歩み寄つて、

「梅子さん、ヤア好い所で逢つた。先刻電車から背後姿を見て、好く似て居ると思つたら、矢張り梅子さんでしたねへ、さあ、早く歸りませう、お母様が

大變心配して居らつしやる。」と、梅子の手を取らうとした。

「嫌やです、妾歸りません。」と、梅子は汚い物のやうに定夫の手を避けて、二歩後方へ退つた。

「何故です。何故歸らないのです。お母様が心配しても關はないのですか。さあ、一緒に歸りませう。」

「イ、エ、妾、歸りません。」

「貴女は、見かけに寄らん不孝者ですなえ。僕はお母様の御依頼を受けて、貴女を探しに来たんですから、嫌やでも何でも連れて歸りますよ。連れて歸らなさいや僕の責任が果せない、さあお歸りなさい。」

定夫は言つた位では逆も梅子が應じないと思つたので、手を取つて引張つた。

「嫌やです、お放しなさい。」と、梅子は振り拂ひながら實を振り返つた。斯うなるのを昵として居た實は、唐突に定夫を衝き退けて、

「コラ！」と一言「何をするか。」と鋭く睨み付けた。梅子はその背後へ小さくなつて隠れて居る。

「何をして好い、貴様こそ何をするか。僕は此女の母親から依頼されて探して居たんだ。貴様が誘拐したんだらう、生意氣なことをすると承知せんぞ。」

「誘拐した？」

「誘拐に違ひないぢやないか、如何なる關係があつて貴様は梅子さんを引張り

廻して居るんだ。何の關係もない奴が、若い女を引張り廻して居るのは、取りも直さず誘拐ぢやないか。』と、定夫は鼻息荒く詰め寄つて、洋杖で地を敲きながら言つた。四周の家々では何事が起つたのかと、窓から覗いて見て居た。面白さうに駈け出して見物に来る者もある。實は若し警官にでも見咎められては、物が面倒になると思つたので、脊後の梅子に向ふへ行くやうにと手で相圖した。梅子はそれと悟つて、足早に歩み出した。

「梅子さん、お待ちなさい。』と、定夫は直ぐ梅子の方へ行つとしたが、

「何所へ行くか、貴様にはまだ要事があるんだ。』と、實の前へ立ち塞つて衝き戻した。

「コラ！、貴様はまだ邪魔するか。』と、尙ほも行つとするから、實はむづと腕を擱んだ。擱まれた定夫は嚇つと怒つて、唐突洋杖で實の額口を打つた。見物人は益々多くなつた。家で見居た者が慌て、飛び出すのもあつた。

「殴つたな此野郎！。』と、叫ぶが否や實は猛虎のやうな勢で、定夫の肩口に擱みかゝつて、振るやうにしたかと思ふと、足をぼんと蹴つて物の見事に投げ付けた。投げられた定夫は、口惜しさうに彈ね起きて、又闇雲に武者振り付いたが、實は微笑を口邊に漂せながら、落ち着き拂つて又鮮かに投げた。高襟の洋服に撒水の泥が付いて、お氣の毒な姿、見物人は大喜びである。その見物人の中から、

「如何したく〜。」と、若い男が定夫を助け起したので、實は面倒だと思つて、そのまゝ見物人を別けて梅子の方へ走つた。

「おい、野郎逃げやがつた、敏捷い奴だ。」と、見物人は物惜さうに實を見送つたが、當の相手が屁垂れたので、さて追ふ者は一人もなかつた。

實はやうやく四ツ角まで走つて、其所で案じ煩ふて居た梅子に逢つた。

「如何なすつて？」と、梅子は泣いて居た。

「甘くやつた。二度ばかり投げてやつたが、案外騒ぎが大きくなつたもんだから、隙を見て逃げて來た。見付かつちや面倒だから、早く行かう、厩橋から一錢蒸気で歸らう。」

實は脊後を振り返り〜、梅子を急がして厩橋まで駆け付けた。そして、停船場へ下りて始めて吻としたが、落ち着くと、それからそれへと心配が起る。

「梅さん、あの鹽梅ぢや、迎も乳母の家は容易に見付からないかも知れんが、困つたねえ、差し當つて、梅さんの行き所がない。」

「迂濶に、乳母を探しにも行けませんわねへ。」

「然うだよ、困つたねえ。僕の家へは置けないし。」と、實は思案の腕を拱いた。

「いつそ、間借でもして、暫らく様子を見て居るかね。」

「其處ところ、あつて。」

「あるさ、幾等もあるかね、僕の知つてる家へ、頼んでも好い。一人では淋し

いから、梅さんは嫌やかね。」

「嫌やぢやないわ。」

「ぢや然うしてお居ですよ、ねえ、その内僕が乳母の家を探すから、」

「エ、何から何まで御心配をかけて、濟みませんわねえ」と、梅子は最う涙組んで居た。

厩橋を上り下りする船は、如何にも暢氣さうに、真帆片帆の風に任せて、急かす騒がず川面を迂る。そよ吹く風に浮れ飛ぶ都鳥も、波に落ちては波に戯れ、此所を無心の別天地、向ふ河岸の家根には、暑苦しうな炎陽が舞ふて居る。

〔三三〕

定夫は集つた見物人に同情せられ、又嗤れてすご／＼其所を立ち去り、電車に乗つて直ぐ浅倉家へ歸つた。

「まあ、如何なさいました。大變お洋服が汚れて居ますわ」と、お勝は御大層に驚いて、脊中の方を拂つた。如何せ撒水で濡れて居た所へ、二度も投げられたのだから、少々拂つた位で落ちるものではない。

「イヤ、好い／＼」と、定夫は無下に斷わつた。

「早くお脱ぎなさいませ、干かして揉まなければ、迎も拂つた位ぢや落ちませ

んわ。」

「ウム、關はないさ」と、そのまゝ定夫は奥へ行つた。

奥では相變らず松代と泰輔が、一盃機嫌で愉快さうに臥轉んで居た。晝間は
大抵泰輔は居ないのだが、定夫が來たのと、梅子が居なくなつたので、出ない
のだと見へる。

「オ、定夫か、如何したく」と、先づ泰輔が訊いた。

「大變な奴に出會しましてねへ、此通りです、酷ひ目に逢ひましたよ」と、二
人を驚かすやうな思はせ振りで、汚れた服を示した。すると、案の如く二人は
驚いて、先づ松代が起き直つた。

「まあ、泥が！如何なすつたの？」

「喧嘩でりしたのかい。」

「エ、やりましたとも、梅子さんは、大變な奴に誘拐されて居るんです。」

「誘拐？」と、泰輔と松代は、殆んど同時に聞き咎めた。

「然うです。乳母の家を探す積りで、雷門行きかみなりもんの電車に乗つて、須賀橋といふ
停留場の手前へ來たから下車する積りで、車掌臺しゃせうだいに立つて居ますとね、電車通
りから横町へ這入る女と、牛乳屋らしい格好をした男があるぢやありません
か、その背後姿が、如何も梅子さんに好く似て居ますから、直ぐ下車で、大
急ぎで追ッ駈けて行きますとね、矢張り梅子さんなんです。で、一緒に連れ

て歸らうとしますと、その牛乳屋らしい奴が邪魔をして、なか／＼梅子さんも歸らうと言はないのです。だもんだから、僕も癢に障つて、唐突その牛乳屋を洋杖で毆打つてやつたんです。」

「フム、」

「所が、その牛乳屋の奴、糞力の強い奴でしてねへ、」

「負けたのかい、」

「エ、靴だもんですから、思ふやうに働けませんでねへ……。」と、道に定夫はきまり悪さうに言つた。

「で、梅子は如何した、」

「投げられた間に、取り逃がしました。」

「チエツ、意久地がないねへ」と、泰輔は忌々しさうに憤慨する。

「一體、その牛乳屋ツてのは何でせうねへ。」

と、松代は一人心配し出した。

「多分、乳母の居る家の者か何かだらうさ。然う梅子が、他人の口車に乗つて誘拐される氣遣はない。」

「然うでせうか、では矢張りお須賀はその邊に居るんですねへ」と、松代は心配さうに言つたが、泰輔は考へ込んで返事をしなかつた。で「怎麼男でした、」と止むなく話を定夫に向けた。

「さうですねえ、特徴としては、眉の濃い、色の白い男でした。」

「ちや好い男なんですわねえ。」

「然うです、まあ好い男ですわねえ、中肉中脊で、頭を五分刈にした、一寸書生
ぼのやうな男でした。」

「年は？」

「さうですねへ、二十三四といふ所でせう。」

「ちや實ぢやないか知ら、ねへ貴方、如何も人相の様子ぢや實らしうございま
すわ。」

と、松代は思ひ當るやうに言つた。

「然うかも知れん、一體内田は其後何所に居るんだね。」

「何所か解りませんのよ、だけど、梅子もお須賀も、好く噂して居たやうです
から、知つて居たのかも知れせんわ。」

「然うかも知れんねへ、内田なら、何家へ聞き合せても直ぐ解るだらう、その
方が却て近道かも知れん、何しろ梅子が家出したのは一時的の考へでなくつ
て、以前から企てられて居たのかも解らん、なか／＼用意周到だ」と、泰輔
もそれを信じたらしい、そして、梅子連れ歸ることは、然う容易いこと
でないと思つた「兎に角、内田の住所を調べて見やう、それが先決問題だ」と、
今度は定夫の力をからないで、自から探しに出たが、それも思つたより困難で

あつた。何しろ逼塞して、世間から隠れやうとした内田の侘住居は、相等に懇意にして居た家へさへ、知らして居なかつた。それとも堅く口止してあつたのかも知れぬが、夕方まで彼方此方と尋ね歩いて、儘に何所と知つて居るものはなかつた。

「如何も、解らない」と、泰輔は疲れきつて歸つて來た。

「解りませんか、誰か知つて居さうなもんですねえ、」

「所が、何家へも知らしてないやうだ、或は夜逃げのやうな工合に、越して行つたのかも知れない、如何せ貧乏のドン底まで落ちたんだから、」
「ぢや如何したら好いでせう、」

「仕方がない、根氣よく探すんだねへ、急には解らないにしても、氣長に探しや解らないことはない。」

「然うでせうか」と、松代は頗る悄氣て居る。氣長といつても、十日や十五日なら好いが、二ヶ月も三ヶ月も梅子を呼び戻すことが出来ないとしたら、その間に怎麼間違が起らぬとも限らぬ。幾等母娘の情愛を知らぬ松代でも、たつた一人の娘を取られたと思ふと、聊か心持が好くなかつた。行く末が案じられて心細かつた「あゝ妾が悪かつた」と、顔にこそ出さぬが心の内では私に悔ひて居た。

〔三三〕

一生飼ひ殺しにされる覺悟の乳母のお須賀は、不意に思ひも寄らず松代から暇を出されたので、一時は途方に暮れたが、去りとして主人の言葉に反く譯にもゆかず、涙ながらに一先づ懇意な須賀町の髮結を手寄つて、二晩ばかり宿泊つて居たが、懇意といつても根が他人、さう何日までも厄介にもなつて居られないので、入谷の汚ない裏店で座敷借りをして、洗濯物でもして日を過すことゝした。

髮結が諸家へ出入する度に、お須賀の話をして頼み込んでくれるので、次ぎ

から次ぎへと洗濯物は絶へなかつた。此鹽梅では少しづつでも、死金が残せると、お須賀は非常に喜んで、身の振り方がつくにつれて、思ひ出されるのは梅子の身の上、たつた一言でも二人きりで別れの言葉を交したら、まだそれほごにも案じられないのだが、顔を見るのさへ碌々に見ず、然も梅子の身の危い様子を知りながら、それを外所に出て来たので、あのまゝ定夫と結婚するやうなことになりはすまいかと、道が我が娘と思つて育てた梅子の方が心配でならなかつた。

お年は若いし、お心を察して上げるものはなし、嫌や／＼ながら奥様のお言葉に従つて……と思ふと、凝つとして居られないほど氣にかゝつた。で、何と

かして、最一度お目にかゝつてお様子が知りたいものと、仕事の際を見て淺倉家の附近まで出かけた。

そして、出入の商人を捕へて尋ねたり、隣家で様子を探ぐつて見たが、誰れも知るものはなかつた。

「さあ、何ですかお嬢様のお姿を、暫らく見受けませんが、學校がお済みになつたから、大方お邸に居らつしやるのでせうよ」と、想像話をする位のものであつた。

「鶉川といふ人は、毎日来るやうですか？」

「エ、エ、近頃はすつとお邸に居らつしやるやうですわ、それから、若いお方

も居らつしやいますよ」と、果物屋の妻君は、前からお須賀と知つた顔なので、告口するやうに言つた。

「まあ、然うですか」と、お須賀は少なからず驚いた。定夫さんがまだお邸に居るからには、お嬢様は屹度御結婚遊ばすに違ひない。何所の馬の骨か牛の骨か解らない者……と、堪らなく口惜しかつた。松代の頭を抑へることが出来る者があれば、早速飛び込んで事状を訴へるのだが、そうした者は一人もなし、自分が行つて意見した位では、却つて罵られて追ひ返へされるだけのこと、といつて、此儘打ち捨て、置くことは如何しても出来ず、一人氣を揉んでその邊を逍遙うた。若し梅子にでも逢はれたら……と、叶はぬこと、知りながら、思

ひきつて歸へられぬ深い因縁、お嬢様に一目なりと……と叫はぬ時の神頼みをしながら、根氣よく行きつ来つして居たが、逢ふもにことを缺いて、内田家の様子を探りに出た鶴川泰輔に偶然出會した。お須賀は此畜生が……と横を向いて他人扱ひにしやうとしたが、お須賀の居所も探して居た泰輔は、往來で玉を見出したやうな喜び。

『オイ、乳母ぢやないか。』

『へエ。』

『お前は、梅子さんを誘拐したね。』

『エ、ツ、お嬢様が如何かなさいましたか！』

と、お須賀は非常に驚いた。

『如何かしたかぢやない、お前が誘ひ出したのだらう、太い奴だ、松代さんは非常に立腹して、お前を誘拐罪として訴へると言つてる、早く歸へさないのと、赤い着物を着なきやならんよ。』

泰輔は頭から威嚇つけた。

『まあ、滅相もないこと仰有います、私やお嬢様のごとが案じられてなりませんから、一目なりとお目にかゝりたいと思つて、表まで参つたのでございませす。それではあの、お嬢様は家出を……』
と、お須賀は涙を落した。

「ウム、お前は本統に知らなかつたのか。」

「知りませんとも、知つて居れば、態々斯うしてお邸の近所へ様子を見に参りません。」

泰輔は、全く知りさうもないお須賀の様子を見て、一寸頭を傾けたが、直ぐ思ひ付いて「お前は何か、内田の住所を知つて居るだらうねへ。」

「はい、内田様の……イ、エ、存じませんよ」と、お須賀は明瞭いひ切つた。

内田と聞いて、梅子の居所を教へて貰つたやうなもの、慥かにお嬢様は内田のお住居を御承知の筈だから、行つて居らつしやるに相違ない。世馴れないお嬢様が、思ひ詰めて家出をなさるまで御苦勞は……と、つくづく松代の心得違ひ

を怨んだ。

「知らないか、お前が知らない筈はないが。」

と、泰輔は思ひ切り悪く猶ほ追求しさうに言つたが、何と思つてか、そのまゝ黙つてお須賀に別れた。

〔一四〕

お須賀はお午を食べて出たのだが、大部永く淺倉家の附近を迂路ついで居たので、日は最うとつぷりと暮れて、街にはそろ／＼軒燈が光り出さうとする頃豆腐屋の笛が物哀れに響いた。

けれど梅子が家出して内田の家に居ると知つては、假令夜中であつても猶豫して居られるものでない、早速電車に飛び乗つて、三の輪行きの切符を買つた。そして、間もなく三の輪橋の停留場で下車して、一度訪ねに来たことのある内田の住居へ、間違附きもせず這入つた。

「御免下さいませ。」と、聲をかけると、奥に居た宇内翁が、何やら手に掴みながら、

「實か、一郎から電報が来たぞ」と、吐鳴りながら、莞爾して急いで出て来た。餘程嬉しい電報であつたに相違ない。

「旦那様、お久しぶりでした」と、お須賀は顔を見るや否や、懐かしさう

に頭を下げた。

「ウム、お前ぢやつたか。」と、宇内翁はそれと見て、俄かに難解しい顔をした。

「何時もお變りがございませんで。」

「ウム、人間はのう、間違つたことさへしなきやア、御方便なものぢや、貧乏はしても身體は達者ぢやよ。」

「それが何よりでございますねへ。」

「松代さんは如何ぢやの、人間も、あのまゝで一生が終はられ、ば誠に結構さ。」

「如何も、困つたお方でございましたねへ、私も旦那様、お暇になりました。」

「フーム、それや氣の毒ぢや、然しまあ、それも宜いさ。」

「はい、お蔭様で、却つて氣樂に如何なり斯うなり暮すには暮して居りますがたいお嬢様のことが心配になりました、今日も貴方、一目なりとお顔を拜見したいと思ひまして、麴町へ参りましたら、お嬢様は家出遊ばしたさうで……。」と、お須賀は湧き来る涙を拭ひ「それは最う、お嬢様として、家出遊ばすのは御尤でございますが、嘸ぞ御苦勞を遊ばしたことでせうと思ひましてねへ。」

「あれも矢張り因果ぢやよ。」

「はい。」と、お須賀は叱かれてもしたやうに頭を屈めた「それに就きまして

お嬢様は此方様にお居で遊ばすと聞きましたのでございますが、萬一お居で遊ばしましたら、萬望一目なりと……。」と、云ふ言葉を宇内翁は強く遮ぎつた。

「イ、ヤ、家には居らん、假令あの娘に悪い所はないにしても、淺倉家は儂の敵ぢや、儂が不憫と思つて置いてやつても、あの松代といふ奴は性根の腐り果てた奴だから、誘拐したの連れ出したのと、何をいふか解らぬ奴ぢや、家へ来るには來たが、斷じて置くことはならんと斷つた。」

「エ、!。」

「それから、實と許嫁になつて居たのも、儂から改めて破談にするといつてや

つた。』

「まあ貴方は……。」と、お須賀は堪りかねて袖を顔に押しあてた。

「イヤ、それがお互の爲めぢや、儂を冷酷ぢやと思ふなよ。梅子にしろ實にしろ、今が大切な時ぢや、出来ない事を思ひ詰めて、煩悶ばかりして居ては、一世浮ぶ瀬がなくなる」

と、宇内翁は愁然として理を釋いた。理で押し通せない強い力を、無理に押し通うさうとする苦しさを思ひながら、

「ぢやと申しまして、それではお嬢様が、若し短氣なことでも遊ばしたら、と、取り返へしが付きません。それから、如何遊ばしたか、御存じはございます

まいか。』

「知らない。』

お須賀は顔を掩ふたまゝ、暫らく涙を流して居たが、考へれば考へるほど、梅子の身の上が案じられるので、直ぐ暇を告げて表へ出た。

と、表で立聞して居たらしい人影が、反對の方へ歩み去つたが、お須賀はそれにも氣付かないで、トボ／＼金杉の方へ行つた。

それと殆ど一足違ひに、夕方の配達に出た實が歸つて來た。

宇内翁は上り框につゝ立つたまゝ、流石に打ち凋れて考へて居たが、實の顔を見るや否や「オ、實か、一郎が歸つて來るぞ。」と、打つて變つて勢よく言

つた。

「エ、兄さんが。」

「シベリヤ鐵道で出發したさうぢや。」と、握り詰めて居た電報を見せる。

「ヤア、萬歳ですなア、然うですか。」と、實は大喜び、幾度も電報を読み返へして居たが、脇に洋傘が一本立てかけてあるのを見て「是れはお父さん誰のですか。」と、不審さうに手に取つた。

「ウム、忘れて行つたか、お須賀のぢやらう。」

「エ、お須賀？」と、實は又驚いた「お須賀が來たのですか。」

「ウム、たつた今歸つたばかりぢや。」

「然うですか、では追ッ駆けて見ませう。」と、實は直ぐ立ち上つた。

「イヤ、抛とけく、取りに來るぢやらう。」

「ですけど、兎に角出て見ませう」と、實は表へ飛び出した。今日は何て好いことばかりある日だらう……と胸の内、

〔一五〕

態々探し歩いたお須賀が、尋ねて來たといふのだから、いづれ取りに來るだらうとは思つても、一刻も早く會ひたいのは人の情、實は章駄天走りに金杉の

方へ走つて、運好くお須賀に追ひ付いた。

「乳母や、乳母や」と、聲をかけられて、我が他人かと振り向いたお須賀、弗と見れば姿は變つても、まがう方なき實、

「オ、若様！」

「乳母か、」

二人はつと寄り添ふて暫しは言葉が出なかつた。

「好く来てくれたねへ、先日お前の家を探したんだせ。」

「左様でございましたか、それにしても若様、お嬢様は如何遊ばしたか、御存じはありますまい、旦那様のお言葉では、如何やら行く所もないやうな鹽梅

「若しや短氣なことでも遊ばしはすまいかと……」

「イヤ、それは心配ない、實はお父さんに内證でね、つい此先きに置いてあるんだ。」

「エ、それあの本統でございませうか。」

「本統だとも、梅さんもお前に逢ひたがつて居るから、僕と一緒に往かう、」

「まあねへ」と、お須賀は嬉し涙を流しながら、實の手に取り絶つた「有難うございませう、お優しい貴方のなされ方を、お嬢様はさぞ、」

「ナアニ、然ういふ譯ぢやないがね、話の様子を聞いてちや、無理に家へ返へせないし、と言つて、僕の家へは置けないし、乳母の所をと思つても解らな

つたから止むを得ず、汚い二階だが暫らく居ることにしたのさ、その内には
何とかならうと思つてねへ。」

二人は話しながら、狭い横町を下根岸へ折れて、と或る素人家の格子戸を這
入つた。實は急いで二階へ上りながら、階段の半から、

「梅さん、乳母が来たよ。」
と、少しも早く悦ばせたい心。

「エ、！」と驚いた梅子は、直ぐ二階から覗いた「まあ本統に。」

「お嬢様、」
「本統に乳母なの？」

「これが本統でなかつたら、狐が化けて来たんだ。」と、實は會心の笑、それに
續いて上つたお須賀は、

「お嬢様！」とばかり、つと寄り添ふて手を堅く取つた。先づ嬉し涙が止めど
なくはふり落ちた。

「乳母、好く解つたのねへ、」

「若様のお家へ参りましてねへ。」

「然う、妾、乳母に逢ひたくつて……」
と、梅子は膝に泣き伏した。

「よく、よく、それほどまで……。」

二女はワツと泣き伏して、暫らく顔を上げなかつた。嬉しさ悲しさが極度に
なつて、お互に胸が一ぱいになつたのである。

そこへ、階下の妻君が、

「お客様ですよ」と聲をかけた。

悄然と二女の姿を見て居た實は、不審さうに首を拈つた。世を忍んだ住居へ
尋ねて来る人のある筈はない、如何いふ間違ひかと思ひながら、

「僕等にですか」と、階段から下を見下したが、客といふのは最上つて來たし
た。顔は好く見へないが立派な男、はてな……と思ふ間もなく、いよく上つ
て來たのは、驚く可し鶴川泰輔であつた。

「エ、ツ！」と、清石の實も惘れ果て、夢に夢見る心地、梅子もお須賀も一
時に青くなつて、犇と寄り添つたまゝ、堅く居住居を直した。

「は、は驚いたかね、悪い事をすりや恐ろしいだらう、貴様は、誘拐罪で訴
へりや、赤衣着物を着なきやならんことを知つてるか。」

「ナニ！」と、實はつゝ立つたまゝ拳を握つて、瞬きもせず睨み詰めた。

「知らなきや如何ぢや、訴へてやらうか、他人の大切な娘を斯ういふ所へ隠し
て、不屈な奴だ！」

と、泰輔は三人を鋭く見較べた。

「黙れ、貴様のやうな、人非人の悪黨と、口を訊くのも汚らはしい、歸れ、誰

の許しを得て上つて来た、』

「生意氣なことをいふな、大莫迦者、松代さんの代理で梅子を連れに来たんぢや、梅子さへ連れて行きや此場限りで許してやる、サア梅子、歸りなさい」と、泰輔はつと寄つた。

「何をなさるのです」と、お須賀は及ばぬまでも梅子を脊後に庇護つた。

「貴様は退けろ！」

と、泰輔は癩癩を起してお須賀を衝き退けた。

それを見た實は「何をするか」と、堪りかねて、泰輔の肩に手をかけて引いた。

「オヤ、貴様は抵抗するか、これほど穩當に言つてやるのが解らんか、それとも巡査を引張つて来やうか、』

「何を！」と、實は口惜さうに奥齒を鳴らした。今泰輔を表へ抛り出すのは造作もないことだが、それでは階下の家へ迷惑をかけるばかりでなく、若し巡査でも呼んで来られては、非常に事が面倒になる、嗚呼、斯うなるのも運命かと涙を呑んで目を閉じた。

「泰輔はさもこそと言はぬばかり、實を尻目づかいに見て「さア梅子、早く歸れ」と、むづと手を攪んで引き立てる。」

「妾、か、歸りません、歸りません、放して下さい」と、身をもがいて振り切

らうとしたが、繊弱い女の小力で振り切れるものではない。

「見ツともない、お母さんの家へ歸るのが、何故嫌やなのだ、さあ、從順にお出で！」

と、無理無體に引き下した。

腕を拱いて、息をはずませて居た實は、失望の餘り全身の力も抜け果て、崩るれやうにドツカリ安座を搔いて、鉛のやうな太い吐息。

「若様！」と、つい先刻まで嬉し涙を零したお須賀は、又しても悲痛な涙。

「ア、梅さんは氣の毒な人だ。」

「萬望、貴方様のお力で……」

お須賀は思はず膝に絶り付いた。

〔一六〕

肉身の母といへば、子として一日も側を離れたくないのが世間一般で、別けて女の子は女親に親しみが深いものだが、松代の心得違から家出して、死んでも母の下へ歸りたくないと思つて居たが、嫌や應なしに泰輔に連れ歸られて、最早や是れまでと娘氣の思ひ詰めた。死んでお父様の所へ行つて……と松代の手前を去り氣なく去つて、自分の部屋へ這るが否や、西洋髮剃を逆手に取つた。

今いまはの際きわに、たつた一目ひとめでも逢あつて、永久とこしへの別わかれを惜おしみたいのは實みとお須賀すか今頃いまごろは如何どうして居ゐらつしやるかと、思おもふと自然そらづと負おれがで出でて、熱あつい涙なみだがハラハラと滴したつた。

松代まつよも梅子うめこの家出いいでから多少たせう己おのれの行おこなひを省かへりみて、過すぎ越こし方かたの罪つみを私ひそかに悔くいて居ゐた折柄をりから、梅子うめこが無事むじに歸かへつたので、道みちが肉身しんみの母娘おやこだけに、言葉ことば優やさしく慰なぐさめて、怖こわい顔かほ一ツ見ひとみせなかつたが、若もし此上このうへに間違まちがひでもあつてはと、虫むしが知らしるか梅子うめこの部屋へやに忍しのび寄よつて、それとなく様子ようすを見て愕然ぎょつと驚おどろいた。驚おどろいて部屋へやへ飛とび込こむが否いなや、梅子うめこの剃刀かみそりをもぎ取とつた。

「梅子うめこ、お前まへはまあ。」

「お母様かあさん、萬望どうぞ、萬望どうぞ殺ころして下くださいませ」と、梅子うめこはわツと泣なき伏ふした。

「イ、エ、お前まへに死しなれて、後あとに残のこつてお母様かあさんが、如何どうなります。今いままでの妾めかけの悪わるい事ことは、何所どこまでもお詫わびするから、萬望どうぞ、梅子うめこ、お母様かあさんの罪つみを許ゆるして

おくれ」と、松代まつよは始はじめて悔くの涙なみだをハラ／＼と流ながした。

「お母様かあさん、本統ほんとうに、本統ほんとうにお母様かあさんは、悪わるいことがお解わかりになりましたの、萬望どうぞ亡父様おとうさんの事ことをお忘わすれにならないで下くださいませ、そして、妾めかけと二人ふたりきりで、

暮くされるやうにして下くださいませ。」

「エ、エ、それは最もう梅子うめこ、お母様かあさんは屹度きつと亡父様おとうさんの御遺言ごいごん通り、お前まへと實みを添そせて上あげるからねへ、短氣たんきな事ことをしておくれでない。今日けふ限り、鶉う

川さんにも来て頂かないやうに、妾から好く言ひます、』
『お母様、嬉しうございます。』

『ではねへ、明朝といはず、いま直ぐ鶴川さんに然う言ふから、本統にお前、短氣なことはねへ。』

『はい、お母様さへ然うして下さるなら、』

『好いともね、ア、永い間、お前に苦勞させたわねへ』と、一度悔ひれば我身ながら、犯した罪が恐ろしくて、松代はしばしの猶豫も出来なかつた。晝の疲れをチビリ／＼晩酌で癒して居た鶴川泰輔の座敷へ、血相かへてづか／＼這入つた。

『如何したね、一杯飲まないかね』と、泰輔はそれとは氣付かないから、常の通りの馴々しい態度、けれども心から悔悟した松代は、そんなことを聞くさへ苦みの種であつた。

『鶴川さん』と、先づ何日になく姓を呼んで『良人も随分妾に罪を作らせたわねへ。』

『莫迦なことをいふもんぢやない、梅子は如何したね。』

『梅子は如何もしませんが、妾は今日限り全部改心しました。梅子は如何あつても、定夫さんと夫婦にはいたしません』と、眞青になつた面を正面に向けて、濃い眉を蹙撃したやう動かさせた。

「アム、ちや俺とも切れやうといふんだね。」

「萬望鶴川さん、何にも言はないで切れて下さい」松代は頹然と手をついて、顔を隠すやうに頭を下げた。

「切れてくれ？」と、泰輔は始めて本氣に向き直つて「よし、切れるといふなら切れてやらう、だが、俺達二人は切れても、梅子と俺との血統は切れないよ。梅子は俺の娘だからねへ。」

「アレ、其麼大きな聲で」と、松代は慌て、口を抑へやうとした。泰輔はそれをかき退けて、

「誰が聞いたつて、是ればつかりは事實だ、主人の目を盗んで、こつそり忍び

合つて出来た娘が梅子ぢやないか。」

「エ、し、靜かに……」と、言ふが否や、松代は先刻梅子からもぎ取つた剃刀を逆手に持つて、唐突に泰輔の首筋を斬り付けた。

「ヤツ、さ、き斬つたな。」

「それを言はれては止むを得ません、お氣の毒でも命をもらひます」と、松代は猶ほ數ヶ所に斬り付けた。幾等男でも不意を食つては堪らない、然かも酒がそろ／＼廻つて居た所」

「し、人殺し」と、深手を負ふてよろ／＼しながら刃を拂ひ退けやうとした。先程から様子を窺つて居た梅子は、慌て、飛び込んで、

「お母様、お母様、待つて下さいませ」と、止めやうとしたが、何しろ氣が立つて居るから見るも恐ろしい形相、逆も側へは寄り付けなかつた。

その内泰輔は二三ヶ所斬り付けられて、血潮は座敷一面に唐紅、呼吸は掩々として苦しき有様、終に煙草盃に躓いて、バツタリ其許へ仆れてしまつた。

松代はそれを見済して、我と我咽喉を剃刀で抉つて、同じくバツタリ打ち倒れて、如何にも苦しき息使ひ。

「お母様」と、梅子は夢中で駆け寄つたが、如何にもしやうのない女の細腕、泣くより外にせんすべはなかつた。

「梅子、萬望、萬望實さんと添ひ遂げて……」
と、言ふ聲も苦しき虫の息。

此騒ぎに驚いて、警察へ行かうと思つて飛び出した下女のお勝は、門を出るが否や、様子を窺ひに来て居た實とお須賀に出會した。

「オやお勝さん」と、お須賀は不審に思つて聲をかけた。

「誰だね、まあお須賀さんか、た、た大變なことが出来たのよ、」

さうなくとも、梅子の身を案じて様子を窺つて居た實とお須賀、大變と聞いて顔色をさつとかへた。

「ど、如何したの、如何したのさ。」

「奥様が、鶺鴒さんを殺した。」

「エ、ツ」と、お須賀も實も同時に驚いた。驚いて其まゝ何にも言はず、慌てゝ門内へ飛び込んだ。そして座敷へ行つて見ると、丁度松代が咽喉を斬つたとふろ。

「梅さん」と、先づ實は泣きながら、松代に縋り付いて梅子に聲をかけた。驚いて振り向いた梅子は、

「兄さん……」

「奥様！如何いふ譯で貴女はまあ」と、お須賀は虫の息の松代を差し覗いて、老の涙を浮べた。

「乳母、萬望免しておくれ、梅子のことを、ねへ、實さんも、今までのことを水に流して、梅子と一生、仲好く暮して下さいねへ。」
松代は苦しみながら片手拜をした。

「それは、決して御心配ありません、屹度、屹度添ひ遂げますから……。」
と、實も目をうるませて、耳に口を寄せるやうに言つた。
その隙に、梅子は母の手から急いで剃刀をもぎ取つて、我と我が咽喉を突かうとした。

「危い、梅さんまで、何だね。」

「イ、エ殺して下さいませ！」

と、梅子は泣きながら剃刀を取り返さうとする。

「何故、何故梅さんが死ぬんだ。」

「妾の血は、妾の血は、け、汚れて居ましたのよ。」

「エ、ッ。」

「妾のお父様は、あの、鶴川さんでございました」と、梅子は全身の力が抜け
たやうに、バツタリそれへ倒れた。實もお須賀も、流石にそれには驚いたので
あつた。

松代と泰輔以外には、知る人はない筈の深い秘密、深手の松代も酷く耻ぢて
今はの際に堪へがたい苦悶。

實は昵と目を閉ぢて、太い溜息を洩したが、

「梅さん、貴女の身體には、誰のよりも一番多く乳母の血が通つて居るから
ね、……ねへ、乳母。」

「若様。」

と、お須賀は優しい實の言葉につまされて、嬉し涙に咽びながら、實の膝に取
り絶つた。梅子も同じく取り絶つて、

「ではあの……妾を……。」

と、昵と顔を見上げた。

「梅さんは矢張り、何所までも僕の妻なんだからねへ。」

「有難うございます。」

優しい實の言葉に、梅子もお須賀も胸が潰れるやうな嬉し涙。

〔一七〕

一度は我から母を見捨て、家出をさへしたやうなもの、今はその前非を悔ひ、自刃して果てやうとする松代の有様を見ては、梅子は心から悲しみますには居られなかつた。お須賀も實も同様である。早速警察官の臨検を願つて、泰輔の死骸は定夫に引き取らせ、加害者の松代はまだ息があつたので、最寄の病院へ昇ぎ込んだ。

然し松代の傷は、餘程の重傷で逆も助かる見込はなかつた。殆んど人事不省に陥つて、意識が朦朧として居るやうであつた。

「梅子、梅子、實さんと仲好く暮しておくれ、實さん頼みますよ。」
と、口癖のやうに、誰を捕へてもさう言つた。お須賀の手を握つて言つたこともある。廻診に來た醫者の手を握つて、梅子と呼びかけながら言つたこともある。で醫者が、

「エ、心配しなくつても大丈夫です。仲好く暮しますよ」と、耳に口を押しあてるやうにして言つたが、松代は恰も聞へぬかのやうに、ウト／＼して居るらしかつた。

たゞ一度、死ぬる前の日の夕方、稍や意識が鮮明になつたと見へて、實が父に内證で見舞に來ると、暫らく顔を噴めて居たが、

「實さんなの」と、如何にも悲しさうに呼びかけて「梅子を可愛がつてやつて下さいねへ。」

と、一言割合に明瞭した聲であつた。

「はあ、ご安心なさい、最う小父さんが居らつしやつた時分と同じやうな心持で居ますから、ねへ安心して早く快くなつて下さい。」

實の聲が耳に這入つたと見へて、松代は白い齒を見せて僅かに笑を浮べた。それが此の世に於ける最後の笑であつた。午後の九時頃から病勢が俄に改まつ

て、醫師も看護婦も附きつきり、梅子もお須賀も一睡もせず看護したが、翌朝の六時過ぎに、終に果敢なくなつたのである。

梅子の悲しみは一方でない。杖とも柱とも思ふものはお須賀一人、それも餘命の短かい老の身で、行く末までの手寄にはならぬのである。兄とも思ひ良人とも思ふ實こそ、梅子に取つて第一の手寄であるが、宇内翁の頑固な性癖を知つて居るだけに、實が如何に感めてくれても一時の氣休としか思はれるない。然かも、父の手前があるからと言つて、家業の隙にちよいと來てくれる位のことだから、一切を擧げて相談することさへ出來なかつた。それが梅子に取つては悲しい一つである。

「實様も、あ、仰有つたからには、此ま、お見捨てになる氣遣はありませんか、ご心配なすつては不可ません、私が、好くあの方のお心持は存じて居ります。」

と、お須賀は口癖のやうに言つて慰めた。

「だって、色々御相談したいと思ふんだけど、些とも入つして下さらないんですもの。」

「さあ、それが矢張り、旦那様の手前がありますからねへ、その内には、私が

「旦那様にお話して、何とか好いやうにいたします。」

「駄目なのよ、お父様は、許嫁の約束を、破ると仰有つたのよ、逆も聞いては

下さないわ。」

さうなくても悲しい胸を抱いて居る梅子は、兎角物事を悲観する傾向さがあつた。

「イ、エ、それはほんの一時の心持で、何も表面上の破談をなさつた譯ぢやございませぬ。貴女様と實様のお仲は、お亡なり遊ばしたお亡父様と、内田の旦那様のお約束でございますからねへ、これが纏まらなければ、私だつて黙つては居りませぬ。」

と、お須賀は悉皆呑み込んだ胸を、軽く敲いて慰めた。

「でもねへ乳母や、妾の……妾の身體には、汚れた、罪惡の血が流れて居るの

だから……』

『はて、それを若旦那様が仰有るものですか、それは大丈夫ですわ、御安心なさいませ。』

『然うか知ら！』と、梅子は深い沈黙に落ちて、見せてはならぬと思ひながら、つい物憂い顔をせずには居られなかつた。

〔一八〕

母を喪つてから、一層將來を案じて居る梅子の悲しさは一通りでなかつたが、父の顔色を窺ひながら氣儘に見舞にも行けぬ實の苦しさも一通りではない。一

寸の隙を見て、いざ一走り見舞つてやらうと思ふと、運悪く思ひも寄らぬ用事が出来て、自由に出ることが出来なかつた。

『嗚ぞ梅さんやお須賀が、心配して居るだらう。不人情な者と思つて居るだらう』と、絶へず心にかけてながらも、父の手前があるので、顔色にも出せなかつた。

然かも、兇行があつた翌日、宇内翁が淺倉家の記事を見て以來、一層實の行動に注意するやうであつた。

『不義の末は、結局は斯うなるものに定つて居る。嗚ぞ淺倉重臣が地下で涙を流して居るだらう、好い耻晒した。』

と、如何にも憎々しうに嘲笑つた。

「飛んだことをやつだもんですねへ」と、實は態と耄けて居たが、斯うした父の口吻を聞いては、遠かに前途を危ぶまぬ譯に行かなかつた。もし父の言ふ通りに、此ま、淺倉家と因縁が絶へたら、嗚ぞ梅子が悲しむことだらう。お須賀が怨むことだらう……と、心は將來の悲劇に走つた。

「これが當前ぢや、斯うあるべき筈ぢや、お前も是れに鑑みて、決して間違つた道を歩んではならぬ、」

「はい。」

實は何となく、自分の心を見透されて居るやうな氣がした。

「決して梅子が不憫だぞと思つて、立ち寄つたりなぞしてはならぬぞ、お互ひに一生を過る因だ、遠い／＼所の火事だと思つて居なさい。」

「はい」と、實は叱られてもしたかのやうに、凝と俛首れて居たが「然しねへお父さん、梅さんが可愛想ですなへ、あの娘は子供の時分から、内氣な優しい娘でしたから、小母さんが居なくなつたら、嗚ぞ心細いでせうよ。」

「親の因果が娘に酬いといふのは、此所のことぢや、如何も仕方がない。」

「あの娘には罪がないのですからねへ、又地下に居る小父さんも氣の毒ぢやありませんか、此際、梅さんよりも何よりも、地下の小父さんに對して、何とかお父さんも、慰藉の方法をとつてやらなければ濟まないかとも思ひますが

ねへ。』

「莫迦の事をいふ、お前はまた梅子に未練があるのか。」

「イ、エ、さういふ譯ぢやありません、小父さんとお父さんとの關係から、黙つて見て居るといふのも、好くないとも思ひます。」

實は多少なりと、父の心に淺倉家との關係を呼び起させて置きたいと思つたのである。

「そりやお前が言はなくつても、淺倉重臣は儂の心を好く知つてるぢやらう。今まで年に一度でも行き來をして居たのなら兎に角、全然絶交のすがたになつて居たに抱らず、主人たる松代が死んだから急に淺倉家へ出入りして見な

さい。自然にお前と梅子の間柄が濃厚になつて、結局は結婚でもすることに
なるかも知れぬ。然うなれば、成程地下の重臣は喜ぶかも知れぬが、儂が世
間へ顔出しがならぬ。松代が死んだのを幸に、急に出入を始め、財産に目
がくれて息子を養子にしたと、口悪い世間の奴は言ふに定つて居る。幾等貧
乏はしても、此の内田宇内は、他家の財産に迷つて息子は賣んのぢや。』
「イエ、それは事状を知らぬからで、事状さへ知つて居れば、決して悪いと言
ふものはなからうと思ひます。』

「知らぬから困るのぢや、世間の奴が知らぬから不可なりと言ふのぢや、眞逆
淺倉家と内田家の關係を、新聞に廣告する譯には行くまい。』

「それは、新聞には廣告できませんが、事實は事實として、自然に解ると思ひます。」

「莫迦なことをいひなさい、世間といふものは、さう善意のあるものぢやない
什麼ことに對しても、疑ひと猜とを以つて見るものぢや、理由を知らぬ癖に
悪ざまに言ひたがるものぢや、斷然梅子のことは思ひ切つて、彼娘以上の、
立派な妻を持つことを心掛けなさいやならん、好いか。」

「はい、それは、僕は其積りで居ますが、小母さんが、絶命する時まで、その
事をいつたさうですからねへ。」

「お前は、其麼ことを、何所から聞き出して來たのぢや、儂に隠して、淺倉家

へ出入して居るのぢやないか。」

「イ、エ、決して、其麼ことはありません。」

「なければ好いが、若しあつたら承知しないぞ、可愛い子でも家の面目にはか
へられない、勘當するからその積りで居るが好い。」

「はい。」

と、實はそのまゝ口を噤んだ。これ以上執固く言へば、癩癖の宇内翁の目尻は
吊り上つて、大喝一聲出て行け！と來るに定つて居るのである。

〔一九〕

浅倉家に不詳事が起ると殆んど同時に、永い間不遇に陥つて居た内田家に、如何やら慶事が還りめぐつて、總領の一郎が、異郷で悪戦苦闘をついけ、やうやく業を了て、歸朝すると通知があつたのは最う半月ほど以前のこと、宇内翁は、浅倉家の騒動を聞くに付けて、それ見たことかと、心中大に得意になつて居た。

「永い間苦しい生活を續けたが、儂にも最後の運が來たのぢや」と、隣家の者にまで吹聴した。

その一郎から、いよいよ浦鹽から鶴賀へ着いたといふ電報を握つた宇内翁は嬉しさを禁ずることが出来ない風情であつた。その電報と同時に、大學時代の友人や先生の下へも通知があつたと見へて、尋ねくつて三の輪の佗住居へ、喜びに來る人もあつたので、益々宇内翁の悦びは高潮した。

「イヤ最う、お蔭様で。」と、ニコくしながら、屈めなくても好い頭まで屈めたりした。はたで見る目も嘸かすと、思ひ遣らるゝほどの悦びであつた。得意であつた。

午後二時十五分、東京驛着といふ時間を三時間も前から出向いた。一張羅の服装とはいつても、以前に變る檳榔樹の五ツ紋、嘉平次の古い袴を穿つて、

實と共に驛まで出迎へたが、その又時間を待つもどかしさ、三等待合室で時計を睨みつめながら、胸にかゝつた白髯を扱ひて居た。

やがて、時間間近になると、一郎の友人や大學の教授などが、美々しい扮装で刻々と出迎へに來てくれた。實はそれ等に、一々挨拶して、宇内翁を一等待合室へ引つ張り込むと、嬉し涙を流して、誰彼の辨へもなく、見當を失つた龜の子のやうに、首を伸ばしたり、縮めたり、殆んど悦ばしさに逆上せきつて居た。

斯うして懐しい一郎と、七年振りでブラットホームで逢つた時、宇内翁は公衆の前も憚らず、手を握つて嬉し涙を流した。

「一郎か……一郎か……。」

といふ外、暫らく言葉は出なかつた。そして、一同の出迎人が内田君萬歳と大聲をあげた時、同じくそれに和して、氣でも狂つたやうに古い茶の中折帽を振つた。

一郎は、英佛兩國で、法學博士の學位を得て歸朝したのである。都下の新聞は、争つて歸朝談を掲げ、大學時代に拔群の秀才であつたことまで附記して居た。此の慶事を、他所に見た梅子は、如何に悲しかつたらう、實が絶へて訪れないのを、如何に情なく思つて居ることであらう。

一郎が歸朝した翌日、梅子からお祝ひの手紙が來た。宛名が内田宇内様とし

てあつたので、實は受取るには受取つたが、父に出すのを躊躇した。嬉しさに気が立つて居る折柄だから、渡せば必ず引き裂くに定つて居る。實は暫らく躊躇して居たが、兎に角兄に相談することにして、先づ淺倉家との關係を話して梅子の手紙を示した。

「さうか、遂忘れて居たが、然う言へば淺倉家から誰も來なかつたねへ、相變らずお父さんは痲癩持だと見へる……、好しく、心配するな、幾等小母さんが氣に入らぬにしても、死んでしまつちや仕方がないぢやないか、然かもお前を淺倉家の養子にするといふことは、小父さんの約束だ、男が一旦約束して、履行しないといふことがあるものか」と、一郎は一も二もなく實の

意見に同意した。

「然うでせう、ねへ、僕も、お父さんに随分言つたのですけれど、何と言つても承知しないのだから困りました。然し、兄さんがその意見でしたら、最う大丈夫だ。」

「乃公から又、好くお父さんに言つてやる、梅さんも随分變つたらうねへ、子供の時から逢はんのだからねへ、可哀想に、心配しないやうに、お前から好く言つてやりな、一人ぢや心細からうよ。」

「え、では、此手紙は……。」

見なくつても解つてる。お父さんに見せないで、お前が開封したら好いだら

う。

「さうですか。」

と、實は始めて胸を撫で下して、自分の部屋で封を切つた。中は無論祝ひの文句だけであつた。で、實は、その返事といふ意味でなく、一刻も早く梅子に安心させたいと、筆を取つて走らせた。

梅さん、其の後僕が行かないから、心配して居たらうねへ、一寸行きたいと思つても、兄の歸朝で、何かと忙しかつたものだから、つい出られなかつたのです。それに父が例に依つて頑固なことを言ふものだから、

思ふやうにならないでねへ、僕も随分氣を揉んで居た。

ところが梅さん、今日兄さんに、梅さんの事や浅倉家と内田家の事を話して、御相談した所がね、兄さんは、僕等に非常に同情して、機を見てお父さんに言つてやるといふのです。兄さんから言へば、如何にお父さんが頑固でも、屹度承知するに定つて居るから、安心してお居で、急ぐから詳しい事は會つて話します。乳母やに宜しく。

梅子さま

み の る

母と娘終

實は筆の運びももどかしさうに斯う書き終つて封をした。父に見られてはと
 それでもまだ遠慮しながら、最寄のポストへ入れた。最早や内田家から捨てら
 れたと、悲観して居た梅子は、此手紙を見て如何に喜んだことであらう。
 それより五年を経た夏の盛りに、大學の法科を優等で卒業した淺倉實といふ
 青年の肖像が都下の各新聞に掲載せられた。

大正七年一月四日印刷
 大正七年一月廿日發行

母と娘 著者 頰冠者

印刷者 新井由藏

發行者 服部喜太郎

發行所 求光閣書店

東京市京橋區本材木町三丁目廿番地
 電話東京二二二九番
 東京一九〇九番

不許複製
 定價廿五錢

庫文劇悲

歌の春

口作の心會園星野天口

妖艶極まりなき新らしき女の色彩濃き生涯を見ずや？

若々しく、美しい鶯の音が梅の梢を傳ふ様に春を知り初めた若くは、希望と光明と理想と憧憬に張り切つて居る。青春の血潮の狂ふまゝに歡樂に酔ふた女、多摩子は、問題に問題、題を惹き起して終に自から其の渦中に苦しむ。彼女の問題、めに、良人の愛を奮はれた若い妻や、翻弄せられたし、有爲の青年の懊惱は如何ばかりぞや？、妖艶なる女優多摩子を、中心として、色彩豊たけき現代を背景に描ける曲折無限の作品也。

本能中心主義なる苦き女の惨たる終局を……

行刊閣光求京東

錢四料送・錢五廿價定

美極幀裝・判六三

入繪口・頁二十九百



庫文劇悲

世きう

口著者冠頰口

波瀾重疊、事件頻出、一瞬も静止せざる現世の縮寫書たる本書……

虚にならぬはうき世の常とは云ひながら、恰かも黄金の中に生れた義興が、一度事業に手を染めるや、急轉直下！家産を傾け盡し味氣なき浮世の浪に揉れ、て終に愛嬢吉野を賣らんとす。呵、親の心中や如何？娘の悲哀や如何？呵！運命の渦に流れ行く薄命の親子よ

不可抗なる浮世の潮流に漂よひ行く愛らしき浮草の様な美女の生涯を見ずや……

行發閣光求京東

錢四料送・錢五廿價定

美極幀裝・版六三

入繪口・頁〇四百二



悲劇文庫

誘惑

口著園星野天口

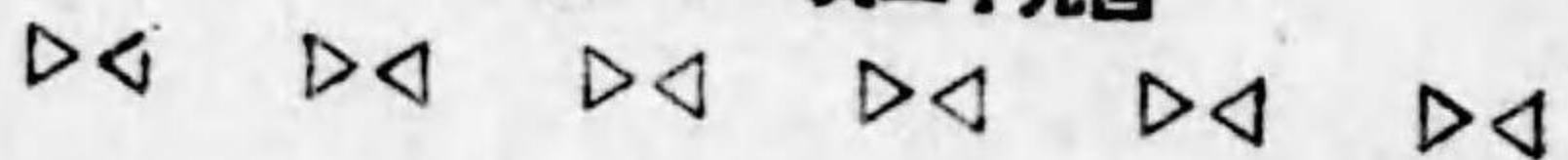
あゝ人類の一大敵は汝等自身の情慾也……………

未だ花も香もある身を以て、丈なす黒髪をプツリと剪り
 亡き旦那への心中立、思ひ出の瓜弾きよりも水晶の珠數
 瓜操りて念佛の片手間に愛兒の養育―清き生涯、本能の
 勝利者たる美はしき女、あゝされど弱き者よ、汝の名
 は女也。本能に不可抗なる彼の女は遂に―又人間のド
 ン底へと引かれて行く……………

絶無比なる本編女主人公一度は情慾に抗せしかども……

行刊閣光求京東

錢四料送・錢五廿價定
裝極幀裝・判六三
入繪口・頁二十九百



悲劇文庫

忘れ子

口著者冠頰口

吁虚榮の人、黄金主義の人の慘たる一生涯を見ずや？

十八年前茶店の床几に置き去りにされた滋子は茶店の娘
 として幸福に育たが兒を捨て子爵夫人となりし母は後悔
 懊惱に年月を送て果ては破鏡の悲哀に逢ふ、武士氣質の
 生父は切腹……………煩悶の高潮、遂に生を振り捨てんとせ
 ば……………吁幸か不幸か昔の戀人に救けられ、死の人とな
 るを得ず。吁不可抗なるは運命也。

輕薄なる現代人に對する絶大のヒントを……………

行刊閣光求京東

錢四料送・錢五廿價定
裝極幀裝・判六三
入繪口・頁二十九百



女は永の疑問也?

<p>△艶色タアブリなる半玉を見よ 半玉……………田村西男著 鳥居清忠装幀及口繪</p>	<p>△情と戀の泉！ 藝者……………田村西男著 鳥居清忠装幀及口繪</p>	<p>△花柳界のカミミ！ 藝者花競……………田村西男著 鳥居清忠装幀及口繪</p>
<p>定價十五錢 送料六錢</p>	<p>定價十五錢 送料六錢</p>	<p>定價十五錢 送料六錢</p>
<p>目がサメル様な濃艶な友禪の袖男を恐ろしいものとは知らず、膝にモタレてお酌する、艶なボタンの様な半玉！花愛らしき其の顔に、露の涙か枕紙！小き胸の安からず……………アノ方、其の描方……鐘の聲が腕曲！華やかにして艶なる半玉の経路を△△△お指事△△△頭痛腕曲！玉△△△外見摸△△△ネツミ△△△鯨の話△△△玄關△△△腹△△△</p>	<p>現代の藝者通は田村先生也、此書は表から裏から横から縦から種々の其のツヤツボイ生活と戀とを描寫せしもの二十一題、讀んで居る内に自ら丹次郎になつた様な氣がして來て面白く可く嬉しく悲しく、ツレツタク僅か五十錢の玉代で身代の三つもツブした位の情味を味ふ事が出来る、實に情緒の海の如く艶なる書である。</p>	<p>芳烈なる酒の香、魅せずば止まぬ濃艶なる藝妓の豐滿なる肉體美！ナツカシキ白粉の香、實に人生喜悅の最高潮たる花柳界の氣分海の如き本書に依りて甘き酒にヒタサレヨ！</p>

—行發閣光求京東—

筋師千代市著

英語獨案内

定價廿五錢 送料四錢

保也 英語を知らざる人は現世界の劣敗者也、一面又無趣味の人も、暗黒界の人も、A、B、Cすら知らざる人は、**本書ヲ讀デ現代ノ人トナレ** 知識アル人トナレ

諸現象に對して死せる人も？
文盲とは實に彼等の罵倒語也、本書はたゞ徒に頁數ヲサゲの本に非ず。霜著者たる筋師氏が米國に九ヶ年の星霜を閲みして得し實地活用の書也。A、B、Cを知らざる人も解するを得。

世に愛がなければ砂漠である間である戀は人生の花である。戀は喜悅の最高潮である。然し世に永久はない蜜の様に相愛する中にして冷やかとなり淋しさをシミと味はさせらる事となる。

浪子 定價卅錢 送料四錢
武男 定價卅錢 送料四錢
優婉なる戀のロマンスを見よ
三六判 百九十二頁

—行發閣光求京東—